

# 平城京朱雀門周辺・朱雀大路・二条大路の調査

—第552次・第566次・第577次・第578次

## 1 はじめに

本調査は、国土交通省による史跡朱雀大路跡等の整備にともなう発掘調査である。発掘調査以前は民間の工場の敷地であった。朱雀門前における朱雀大路、二条大路の規模や様相、ならびに平城京右京三条一坊一坪・二坪・八坪の実態をあきらかにすることを目的として、計4次にわたる調査をおこなった(図193)。ここではこれらの調査をまとめて報告する。

第552次調査は、朱雀門前における朱雀大路西側溝の規模、ならびに右京三条一坊一坪・二坪やその間を通る三条条間北小路の実態の解明を目的として、南北2カ所の調査区を設定した。第566次調査は、朱雀門前における朱雀大路西側溝と二条大路南側溝の規模、ならびに西一坊坊間東小路の位置と規模の解明を目的として、東西2カ所の調査区を設定した。第577次調査は、右京三条一坊二坪における朱雀大路西側溝の規模、ならびに二坪の築地塀の様相の解明を目的とした。第578次調査は、朱雀大路と二条大路の交差点の様相、および二条大路を横断する朱雀大路西側溝に架かる橋等の構造物の有無の確認を目的とした。

各次数の調査期間と面積は以下のとおりである。第552次調査：2015年12月16日から2016年3月30日、北区356㎡(南北20m、東西17.8m)、南区440㎡(南北20m、東西20m、拡張区(南北5m、東西8m)40㎡)の計796㎡。第566次調査：2016年3月8日から7月25日、東区360㎡(南北18m、東西20m)、西区324㎡(南北18m、東西18m)の計684㎡。第577次調査：2016年12月2日から2017年1月31日、120㎡(南北6m、東西20m)。第578次調査：2016年11月14日から2017年1月19日、324㎡(南北24m、東西15mで、西北の南北9m、東西3mの逆L字型部分は未調査)。

朱雀大路とその東西両側溝は、これまでにも奈文研や奈良市教育委員会による調査で確認している。それによると、朱雀大路の東側溝は、左京三条一坊一・二坪付近では幅約3.8～4.5m、西側溝は、平城宮南面大垣付近では幅約2.5m、右京三条一坊三・四坪付近では幅約3.0mである。また、平城宮南面大垣の調査で、朱雀大路西側溝

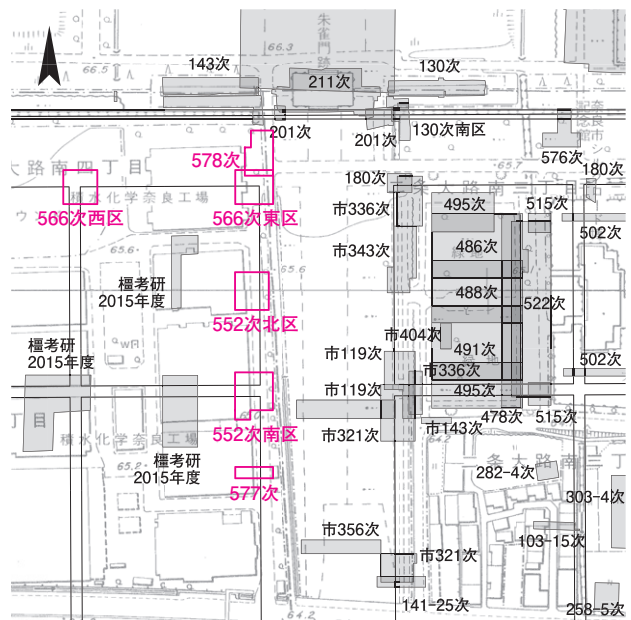


図193 第552次・第566次・第577次・第578次調査区位置図 1:4000

と二条大路北側溝の接続地点を確認しており、朱雀大路西側溝が二条大路を横断することがわかっている。二条大路北側溝との合流点付近における朱雀大路東西両側溝の心心間距離は約73.9mである。

右京域の二条大路とその南北両側溝は、奈文研が平城宮南面西門(若犬養門)の調査で確認している。それによると、南側溝は、幅約6.0m、深さ0.7mで、南北両側溝の心心間距離は約36.8mである。

右京三条一坊一・二坪では、奈良県立橿原考古学研究所が第552次調査区の西方で発掘調査をおこない、三条条間北小路をなす南北両側溝を検出した。北側溝は幅約1.3m、南側溝は幅約1.0mで、両側溝の心心間距離は約6.5m、三条条間北小路の路面の幅は約5.1mとしている。また、西一坊坊間東小路の東西両側溝とともに、三条条間北小路との交差点を確認している<sup>1)</sup>。

## 2 基本層序

基本層序は調査区によって異なるため、北から調査区ごとに記述する。

**第578次調査区・第566次調査東区** 現地表から①現代造成土(約80cm)、②床土(約30cm)、③灰褐色シルト(20～30cm)、④粗砂混灰黄色シルト(5～20cm)、⑤褐色粘土(20～30cm)、⑥黒褐色シルト(20～40cm)、⑦灰色粗砂(約50cm)、⑧褐灰色～灰色粘土(約15cm)、⑨黒褐色粘土(25cm以上)

である。③層の上面では耕作溝を検出しているが、遺物に乏しく時期はあきらかではない。部分的に自然流路の堆積などがあるが、おもに地山である⑤層の上面で奈良時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は約64.3mである。第566次調査東区の西半分は工場建設による削平が著しく、西南部では地表下約2.5m（標高約63.2m）の⑨層まで及ぶ。

**第566次調査西区** 現地地表から①現代造成土（30～40cm）、②床土（30～40cm）、③灰褐色砂質土（5～20cm）、④黄褐色砂質土（30～50cm）、⑤黒褐色粘質土（10～20cm）、⑥灰色砂（30～40cm）、⑦黄灰色シルト（15～20cm）、⑧黒色シルト（10cm以上）である。③層は瓦片を含む。おもに④層の上面で奈良時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は約64.7mである。④層は遺物をほとんど含まず年代はあきらかではないが、二条大路造成時期の整地土と考えられる。⑤層以下は遺物および顕著な遺構は見出されていないが、⑦層は炭粒を含んでおり、下層に奈良時代以前の遺構が存在した可能性がある。

**第552次調査北区** 現地地表から①現代造成土（20～60cm）、②床土（10～70cm）で、以下は地点によって異なる。調査区東側の朱雀大路路面では、③オリーブ褐色粘土（約20cm）、④オリーブ黒色シルト（約10cm）、⑤黄灰色粗砂（約20cm）、調査区西側の右京三条一坊一坪では、③暗灰黄色シルト（約20cm）、④黒褐色粗砂（約20cm）である。いずれも③層以下が地山で、③層上面で奈良時代の遺構を検出した。また、調査区北側の朱雀大路西側溝SD2600西肩付近では、③灰褐色土（SD2600埋土の溢流土、約10cm）、④黒褐色土（約20cm）、⑤暗褐黄色粗砂（10～20cm）、⑥黒褐色シルト（10～20cm）、⑦黄灰色粗砂（10～20cm）、⑧オリーブ灰色シルト（10～20cm）、⑨黒色シルト（20cm以上）で、⑤⑦は自然流路である。遺構検出面の標高は63.8～64.4mである。

**第552次調査南区** 現地地表から①現代造成土（10～50cm）、②床土（20～70cm）、③暗灰黄色シルト（10～30cm）、④灰色シルト（約10cm）、⑤灰色細砂（30～40cm）、⑥オリーブ黒色細砂（約40cm）、⑦黒色粗砂（約20cm）、⑧灰色粗砂（約10cm）である。③層が奈良時代の整地層で、④層以下が地山面となる。③層上面で奈良時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は63.6～64.2mである。

**第577次調査区** 現地地表から①現代造成土（45～80cm）、

②床土（5～10cm）、③灰白色中砂（20～30cm）、④黄橙色中細砂（10～25cm）である。④層の上面で奈良時代の遺構を検出した。遺構検出面の標高は、築地塀の基底部が残存するもっとも高い地点で約64.2mである。

### 3 朱雀大路西側溝・二条大路南側溝開削前の遺構

#### 第566次調査西区

**整地土SX3396** 二条大路南側溝SD4006と二条大路を横断する南北溝SD3400の合流部の北東入隅部にのみ認められる造成土。範囲は東西約7m、南北約6mで、深さ最大1.2m。窪地状地形の地山の上に均質な暗灰色シルト（約0.2～0.8m）、白色粘土ブロック混じりの黒褐色砂質土（10～20cm）、茶褐色砂質土（10cm以上）を積む。暗灰色シルト上面には有機物が密集する。これらは土質から人為的な積土と考えられ、二条大路敷設時に造成した痕跡と考えられる（図201）。

**斜行溝SD3397** 調査区西南部で検出した斜行素掘溝。西南西から北北東に傾斜する。幅0.6～1.1mで、深さ最大0.7m。二条大路南側溝SD4006に壊される。瓦片を含む。

#### 第552次調査北区

**自然流路NR3365～3368** 調査区北部、および東部で検出した北西から南東方向の流路。朱雀大路西側溝SD2600、土坑SK3362・3363に壊される。流路が何度も流れを変えながら存続したと考えられる。

### 4 朱雀大路西側溝・二条大路南側溝機能時の遺構

#### 第578次調査区・第566次調査東区

**朱雀大路西側溝SD2600<sup>2)</sup>** 両調査区では、SD2600を全長約37mにわたり検出した。二条大路を横断し、二条大路南側溝SD4006と合流したのちさらに南流する。SD4006との合流部の南北で様相が大きく異なる（図195）。

合流部の北側では、SD2600を約30m分検出した。この部分は、開削当初のSD2600A、およびそれを埋めた後に西寄りに新たに掘削したSD2600Bに分けられる。埋土は、SD2600Bは上から黄褐色粘土、灰色粘土、ラミナ構造をもつ灰色砂とつづき、SD2600Aは、灰色粘質土、灰色砂、木屑を多く含む暗褐色粘質土、そして最下層が灰色粗砂である。SD2600A・B両溝ともに、上層の粘質土は人為的な埋立土で、下層の砂質土や木屑層は溝

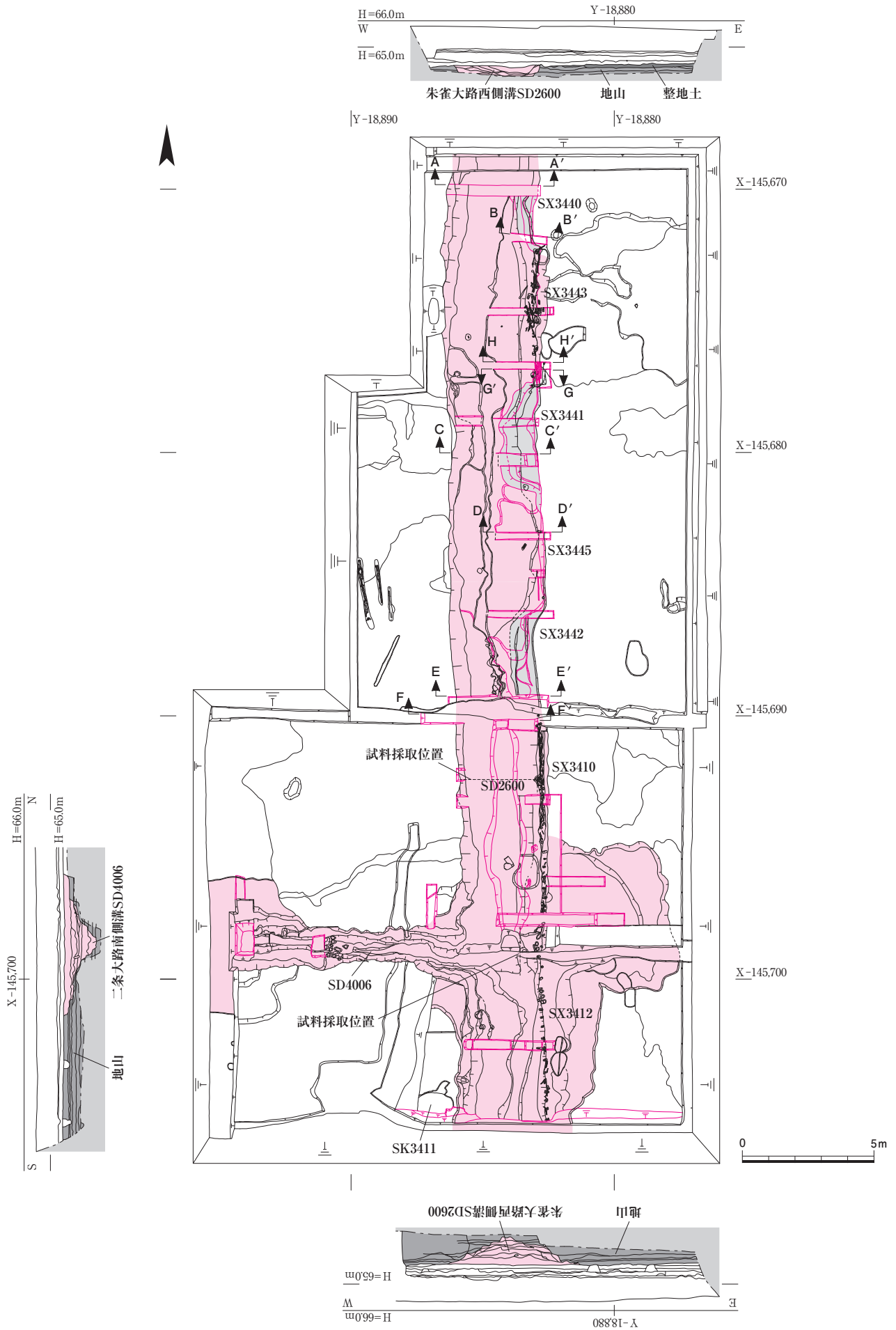


図194 第566次調査東区・第578次調査区遺構図・土層図 1 : 200

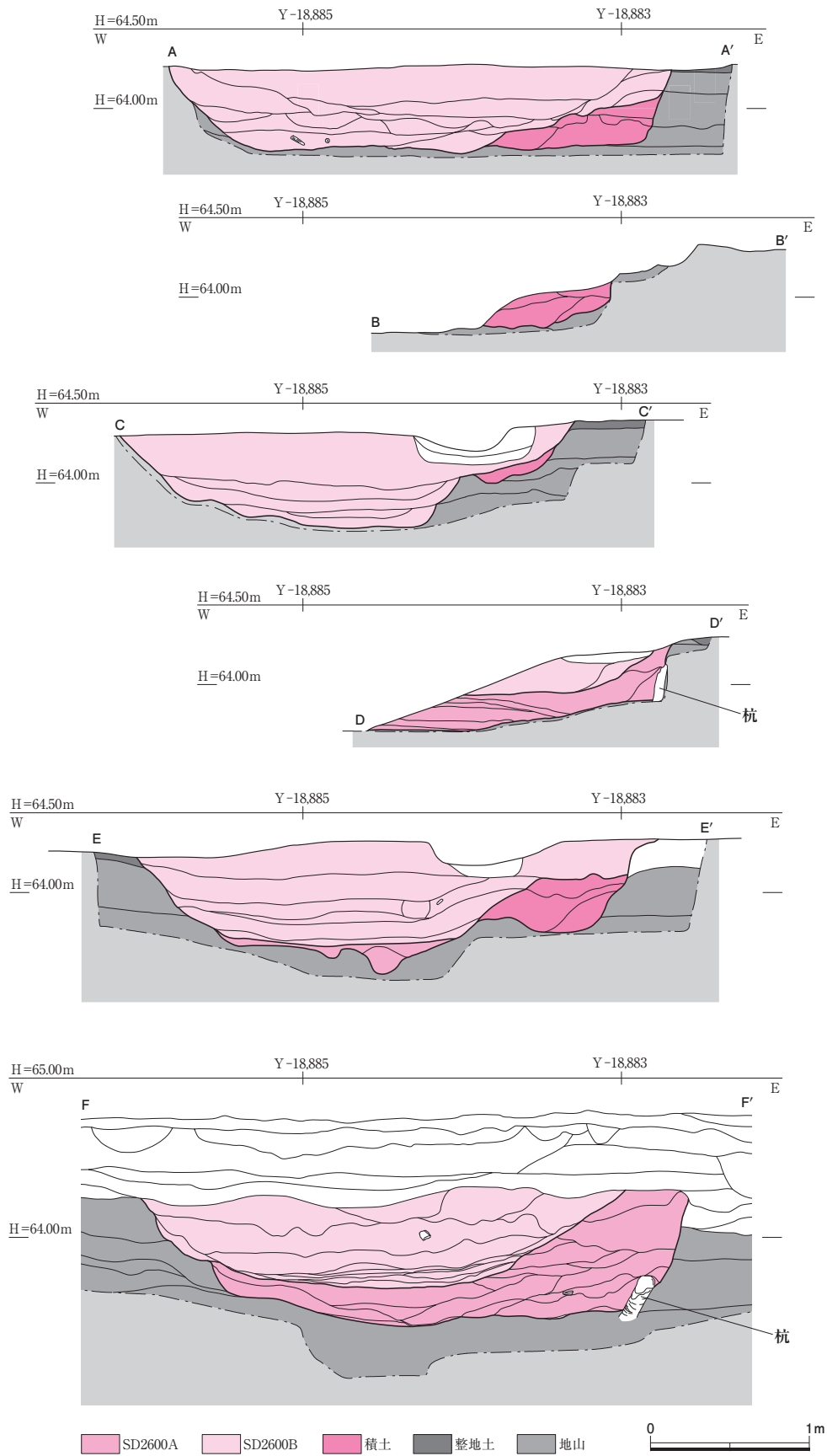


図195 第566次調査東区・第578次調査区 朱雀大路西侧溝SD2600土層図 1 : 40



図196 しがらみ護岸SX3443 (南西から)



図197 しがらみ護岸SX3443の裏込めの木材 (東から)

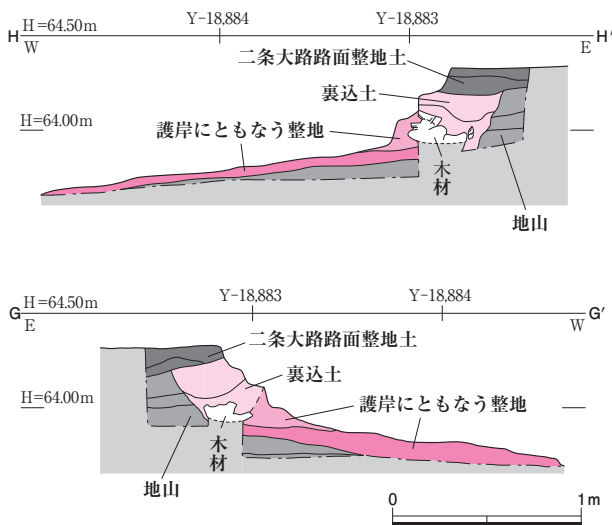


図198 しがらみ護岸SX3443断面図 1:40

機能時の堆積土と考えられる。下層の堆積土から木製品を含む遺物が多く出土した。SD2600Aは東肩のみ検出し、西肩はSD2600Bの掘削時に壊された可能性があるため、全体の幅は不明であるが、SD2600A西岸の立ち上がりの形状から推測して、およそ3.2~3.5m。深さは最大約0.9m (溝底標高約63.5m)。東肩にはほぼ等間隔に張り出す部分を3カ所もつ。これらの張出遺構SX3440~3442は、隅丸状を呈し、二条大路の中軸上と、その南北にそれぞれ心心間距離約9mの間隔で張り出す。SX3441、SX3442の対岸にも張出の痕跡が認められるが、SD2600Bとの重複により明確ではない。SX3440とSX3441の間とSX3442の南には、それぞれしがらみ護岸SX3443、SX3410が残存する。また、SX3441やSX3442のすぐ南にヒノキ (樹種同定はパリオ・サーヴェイ株式会社高橋敦氏による) の大型削片を多量に含む木屑層 (SD2600A最下層) が存在する。SD2600Aのある段階では張出遺構のすぐ南の部分に木屑などがたまりやすい状況であったと考えられる。SD2600Bの規模は、SD2600Aよりやや狭く幅約3.0m、深さ最大0.7m。木杭などの構造物をもたない。検出した西肩はSD2600Bにともなうものであるが、SD2600Aの西肩を踏襲するものか、新規掘削によ

るものかは不明である。

SD4006の合流部およびその南側では、全長約7mにわたり検出した。検出面からの深さは約1.1m (溝底標高約63.2m)。溝 (合流部の北ではSD2600A) の幅は3.2~8.1m。SD4006との合流部では最大約8.1m、それより南では4.2~5.5mで、場所により差が大きい。また溝底が南で西に振れる。合流部南の埋土は上から灰褐色粘質土、暗灰色粘土、暗灰色砂とつづき、最下層が黒色粘土である。土質から下2層は流水時の堆積土と考えられ、上2層は人為的な埋立土と考えられる。東岸には、杭列SX3412を検出した。この杭列は、合流部より北側の杭列SX3410と軸をあわせており、当初は一連の杭列であった可能性が高い。SD4006との合流部分では、おそらく流量の多さを要因として東側に大きくあふれていたと考えられる。

**張出遺構SX3440** 二条大路南北両側溝の心心間距離から算出した二条大路の中軸より、北に約9mの位置に、南北約3.5mの幅で、SD2600Aの東肩から最大で約1.4m張り出す。SD2600A掘削時に地山を削り出し、積土を施して張出部分を造り出す。SD2600Aの東岸に残るしがらみ護岸SX3443は、SX3440の南方でとぎれる。ほかの張出遺構に比べて遺存状態が悪い。

**張出遺構SX3441** 二条大路の中軸上に、南北約3.9mの幅で、SD2600Aの東肩から最大で約1.6mの範囲で張り出す。張出の南北両端を確認した。SD2600A掘削時に地山を削り出し、その上に積土を施して張出部分を造り出す。SD2600Aの東岸に残るしがらみ護岸SX3443は、SX3441の積土に重複する。このことから、SX3441を築いたのち、SX3443を設置したことがわかる。

**張出遺構SX3442** 二条大路の中軸より、南に約9mの位置に、南北約4.1mの幅で、SD2600Aの東肩から最大で約1.2mの範囲で張り出す。地山を削り出し、その上に積土を施して張出部分を造り出す。SX3442の南には、しがらみ護岸SX3410が残る。

**しがらみ護岸SX3443** 朱雀大路西側溝SD2600Aの張出

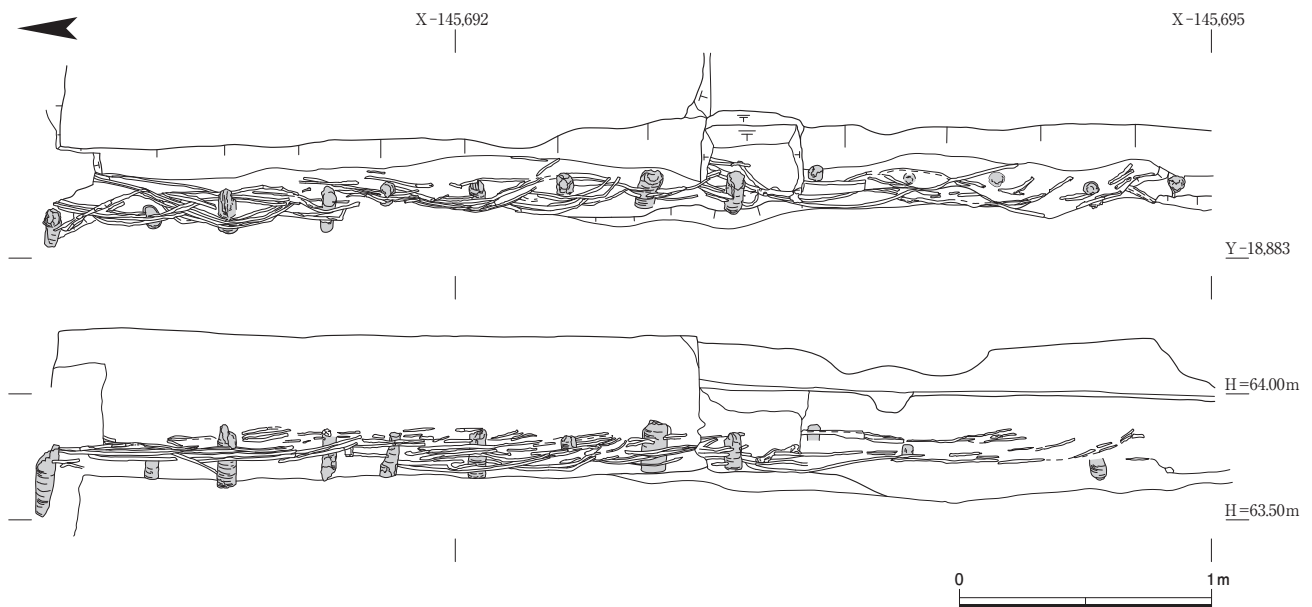


図199 しがらみ護岸SX3410遺構図 1:30

遺構SX3440とSX3441の間で検出したしがらみ護岸(図196)。約0.3~0.5m間隔で径約5~10cmの杭を並べ、その間にしがらみの横材と考えられる細い枝が集中する。それらの背面で幅約25cmの木材を検出した(図197)。木材の前後には裏込土、および前面には護岸ともなう整地がある。最下層は土の乱れがあり、整地と判断したが、地山の可能性もある。それらの上に粗砂混じりの褐色~暗灰黄色シルト層(二条大路路面整地土)が広がる(図198)。このような状況から、二条大路横断部分のSD2600A東岸は、張出部分の削り出し、木材の設置、裏込土の充填、二条大路路面の整地もしくはしがらみ護岸の設置の順に構築されたと考えられる。

**杭列SX3445** 張出遺構SX3441とSX3442の間に径約10cmの杭を2本打ち込む。両者の間隔は約2.5m。しがらみ護岸の一部であったと考えられる。

**しがらみ護岸SX3410** 第566次調査東区にて、朱雀大路西側溝SD2600A東岸で検出した(図199)。張出遺構SX3442の南、二条大路南側溝SD4006との合流部の北側で良好に残存し、溝の検出面から約0.7mの地点で最上部を検出した。構造は以下のとおり。まず、直線的に約0.4m間隔で、長さ0.9m以上、径5~10cmの木杭を溝肩から溝底に向かって斜めに打ち込む。そして、杭間に長さ約2m、径3cmほどの細い枝(サカキ、コナラ属等)を千鳥状に編みこみ、これを最大7段(高さ約0.3m)積み上げる。溝岸と杭との間には裏込土を充填したとみられるが、残りは良くない。

**杭列SX3412** 二条大路西側溝SD4006との合流部より南方の朱雀大路西側溝SD2600東岸で検出した杭列。径5~10cm程度の杭が、約0.3~0.5m間隔で並ぶ。一部で細い枝を確認しており、本来はしがらみ護岸であった可

能性が高い。

**二条大路南側溝SD4006** 第566次調査東区の西半で東西約10mにわたり検出した。朱雀大路西側溝SD2600と合流する。検出面での最大幅は約4.0m、深さは約1.2m。溝底の標高は西端で約63.3m、合流部では約63.2mであり、東流して西側溝SD2600に接続する。また、埋土は、機能時の堆積土を含めSD2600(合流部とその南側)と類似しており、両者は機能時、廃絶時ともに一体であったと考えられる。

**土坑SK3411** 第566次調査東区南端、朱雀大路西側溝SD2600西岸で検出した円形の土坑。検出面はSD2600と同じである。平面規模は径1.3m以上、深さ約0.8m。埋土に奈良時代前半の須恵器杯(転用硯)を含む。

#### 第566次調査西区

**二条大路南側溝SD4006** 調査区の中央で東西約18mにわたり検出した素掘溝。西一坊坊間東小路西側溝SD2641および南北溝SD3400と合流する。規模は、SD3400の東側で幅4.0~4.5m、深さは約1.0m、西側では最大幅約3.5m、深さは約0.7m。SD3400との合流部より東で幅が広く、深さも増す。溝底の標高は調査区西端で約64.0m、東端で約63.7mであり、東流する。埋土は上から灰褐色砂質土(瓦片を多く含む)、暗灰色シルト、灰色砂とつづき、最下層が暗灰色粗砂(土器片と木質遺物を多く含む)となる。

**西一坊坊間東小路西側溝SD2641** 調査区西南部で南北約6mにわたり検出した素掘溝。検出面での幅は約1.6m、深さは約0.5m。二条大路南側溝SD4006との合流部付近では西岸に沿って多量の瓦が出土しており、右京三条一坊八坪に築地塀などの遮蔽施設が存在したことを示唆する。なお、この溝と対になる東側溝は検出されな

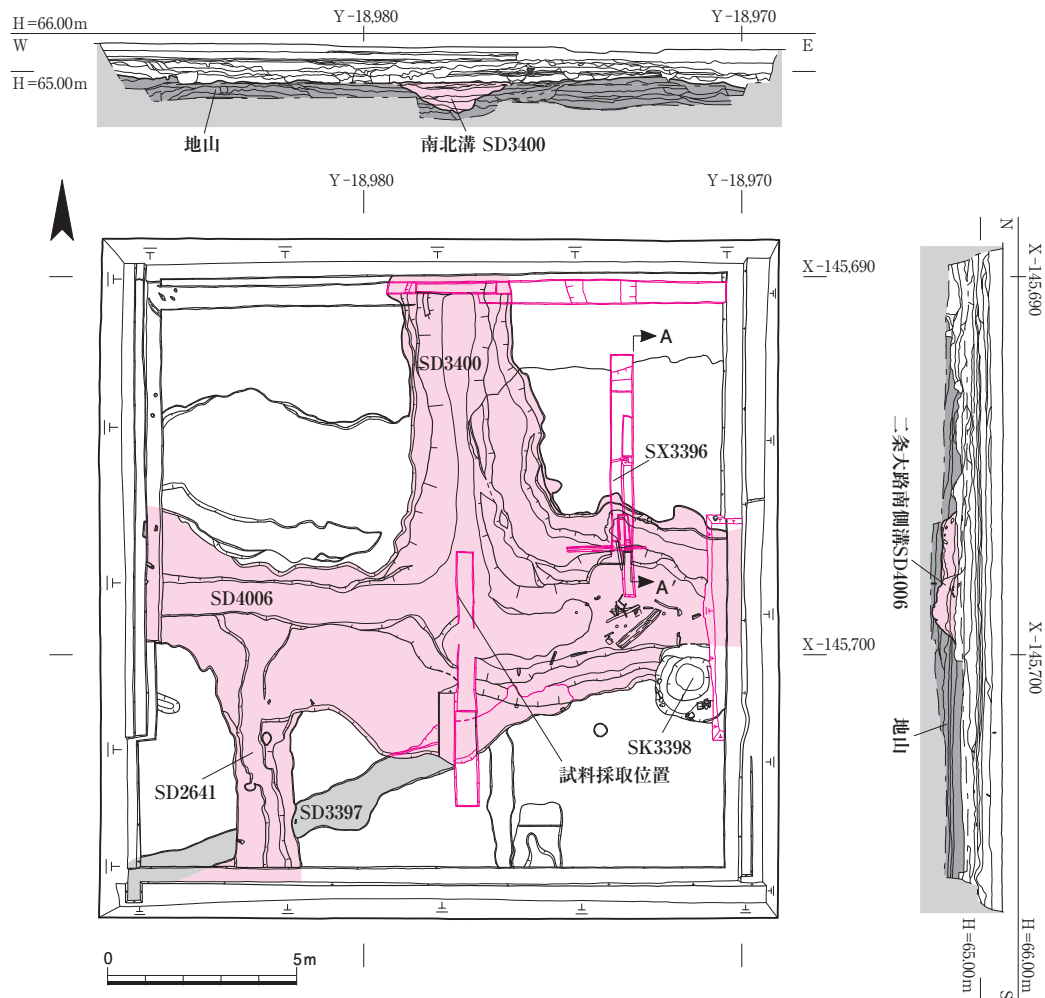


図200 第566次調査西区遺構図・土層図 1:200

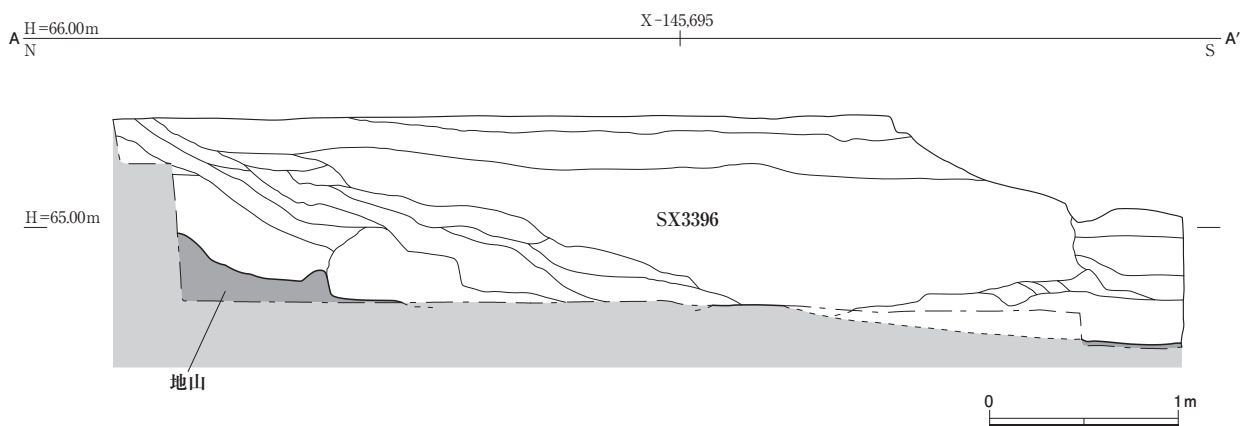


図201 整地土SX3396土層図 1:40

かった。

**南北溝SD3400** 二条大路を横断する素掘溝。南北約5.5mにわたり検出した。検出幅は3.0~3.8m、深さは約0.8m。溝底面の標高は調査区北端で約63.8m、二条大路南

側溝SD4006との合流部で約63.7mであることから、南流してSD4006に流れ込むと考えられる。埋土がSD4006と類似することから、SD4006と機能時、廃絶時ともに一体であったと考えられる。橋の存在を想定し、溝の兩岸

で橋脚等の痕跡を精査したものの確認されなかった。この南北溝はさらに北に延びており、南面大垣周辺または宮内の排水機能を有していた可能性がある。

#### 第552次調査北区

**朱雀大路西側溝SD2600** 調査区東部で、南北約20mにわたって検出した素掘溝。幅は3.0~4.1m、深さは約1m。遺構検出面の標高は63.8~64.0m、溝底面の標高は62.8~63.1mである。溝底は北から南に低くなる。両岸とも二段状に掘り込み、東岸上段は後述する杭列SX3357を打ち込む。埋土は、上層から灰褐色土(約10cm)、灰色土(約40cm)、溝底の窪み部分に砂層(約50cm)が堆積する。砂層からは多くの木片のほか、土器・土製品・瓦・木製品・銭貨・銅釘などの遺物が出土した。

**杭列SX3357** 朱雀大路西側溝SD2600の東岸上段で検出した杭列。計48本の杭を検出した。杭はいずれも径5~8cm前後の丸太材で、0.3~0.5m前後の間隔で直線状に配置する。据付掘方をもたず、先端を尖らせて打ち込んでいる。しがらみの一部であると考えられるが、周辺には細い枝や裏込めの木材は検出されず、前述のSX3443やSX3410とは異なっている。

**橋SX3355** 朱雀大路西側溝SD2600の両肩、および東岸上段の杭列SX3357の東側に隣接した地点において橋脚を5基、その痕跡を2基検出した。東肩の北端、および東岸上段の南端の想定位置では橋脚やその痕跡を検出できていないが、東西2間、南北2間と考えられる。東西方向は軸線にあわせるのに対し、南北方向はずれがあることから、東西方向に桁を架けた上で南北方向に梁を架けた、もしくは板を渡したものとする。橋脚間の距離は、南北方向は北から約1.6m、約1.7m、東西方向は西から約2.8m、約1.0mである。東肩の南端の1基、西肩の北端・中央の2基、東岸上段の北端・中央の2基からは橋脚を検出した。残存幅10~22cm、厚さ4~8cmである。東肩の中央の1基、西肩の南端の1基からは径10~13cmの杭痕を検出した。また、橋の南端位置の朱雀大路西側溝SD2600の溝底より、長さ約1.4m、幅約0.3mの板材が出土した。橋材の一部である可能性がある。

**坪内道路SF3358・北側溝SD3359** SD3359は調査区西北部において検出した素掘りの東西溝。東西約2.4mにわたって検出し、幅は約1.0m、深さは約0.1m。遺構検出面の標高は64.1~64.2m、溝底面の標高は約64.0m。

朱雀大路西側溝SD2600との接続部分は、後述の土坑SK3362・3363によって壊されている。SD3359の検出地点は坪内道路の北側溝想定位置に該当する。X-145.757前後に想定される南側溝は後世に削平されたとみられ検出できなかったが、北側溝SD3359とSD2600にかかる橋SX3355の存在から、この部分が右京三条一坊一坪を南北に二分する坪内道路SF3358に該当すると考えられる。

**杭SX3356** 朱雀大路西側溝SD2600の西肩にて検出した杭。径約5cmの丸杭で、橋SX3355の西端の延長部分に位置するが、橋脚とは形状が大きく異なり、性格は不明である。

#### 第552次調査南区

**朱雀大路西側溝SD2600** 南北約20mにわたって検出した素掘溝(図206)。検出幅は3.2~4.0m、深さは約1.1m。遺構検出面の標高は63.6~63.8m、溝底面の標高は62.5~62.7mである。溝底は北から南に低くなる。両岸とも二段状に掘り込まれ、三条条間北小路北側溝SD3372より北側は、溝内の東岸上段に杭列SX3369が並び、それより南側は西岸上段に杭列SX3370が並ぶ。ただし、三条条間北小路北側溝SD3372、および南側溝SD3373との合流点付近では、東西両側で杭列を検出した。埋土は北区とほぼ同様で、上から灰褐色土(約15cm)、灰色土(約30~50cm)、砂層(約60~100cm)の順にわかれる。砂層からは多くの木片のほか、土器・土製品・瓦・木簡・木製品などの遺物が出土した。また、調査区南半の三条条間北小路南側溝SD3373より南側では、灰色土から多量の瓦類が出土した。

**杭列SX3369** 朱雀大路西側溝SD2600の東岸上段に列状に並ぶ杭列。三条条間北小路北側溝SD3372より北側では13本の杭を検出した。杭間の間隔はおおよそ0.3~0.5m前後で直線状に配置され、第552次調査北区の杭列SX3357と共通する。それより南側では、SD3372の東側延長部分に2本、南側溝SD3373の東側延長部分に3本の杭を検出した。いずれも径5~10cm前後の先端を尖らせた杭で、直接打ち込み、据付掘方をもたない。

**杭列SX3370** 朱雀大路西側溝SD2600西岸上段で検出した杭列。SD3372との接合部から南にかけて、南北方向に並ぶ杭33本を検出した。杭間の間隔は0.1~0.4m前後で差があり、杭列の配置も振れが大きく、東岸の杭列SX3369とは異なる。いずれも据付掘方をもたず、径5~



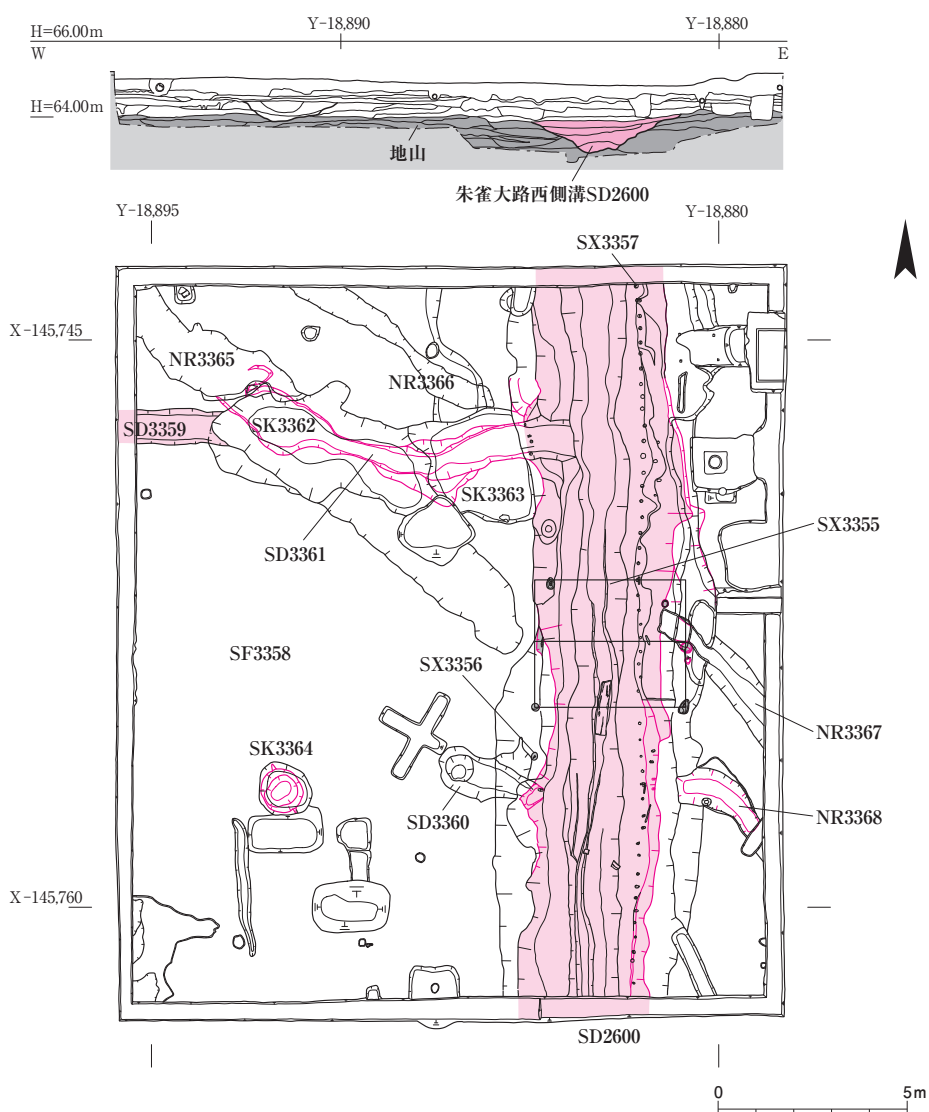


図202 第552次調査北区遺構図 1 : 200

10cm前後の先端を尖らせた杭を打ち込む。なお、三条条間北小路北側溝SD3372との合流地点付近やその北側約2.8mの地点、ならびに調査区北端付近など、SD2600砂層の複数の地点より、杭列のものと同様の丸木杭が横たわった状態で出土している。これらは本来、杭列の一部に用いられたものであった可能性が想定できる。

**三条条間北小路SF3371・北側溝SD3372・南側溝SD3373**

三条条間北小路の南北両側溝の想定位置にて、東西溝を2条検出した。北側溝SD3372は、東西約9.5mにわたって検出した。素掘溝で、幅は1.8~3.5m、深さは約0.3m。遺構検出面の標高は63.7~64.0m。溝底は西から東に低くなり、朱雀大路西側溝SD2600に接続する。また、杭

列SX3370の西側約0.3mの地点にあたる、SD3372の北岸付近において、埋土(灰色土)に打ち込まれた杭を検出した。SD3372の一部が埋め立てられた後に打ち込まれた可能性がある。その北側約0.3mの北岸と朱雀大路西側溝東岸の合流地点付近でも、横たわった丸太材が出土した。南側溝SD3373は、東西約9.4mにわたって検出した。SD3373も素掘溝で、幅は0.9~1.8m、深さは約0.2m。遺構検出面の標高は63.7~64.1m、溝底面の標高は63.5~63.9mである。SD3373も溝底は西から東に低くなり、SD2600に接続する。南北両側溝の間が三条条間北小路SF3371にあたり、両溝の心心間距離は約5.5mとなる。

**南北溝SD3374** 三条条間北小路南側溝SD3373へ南か

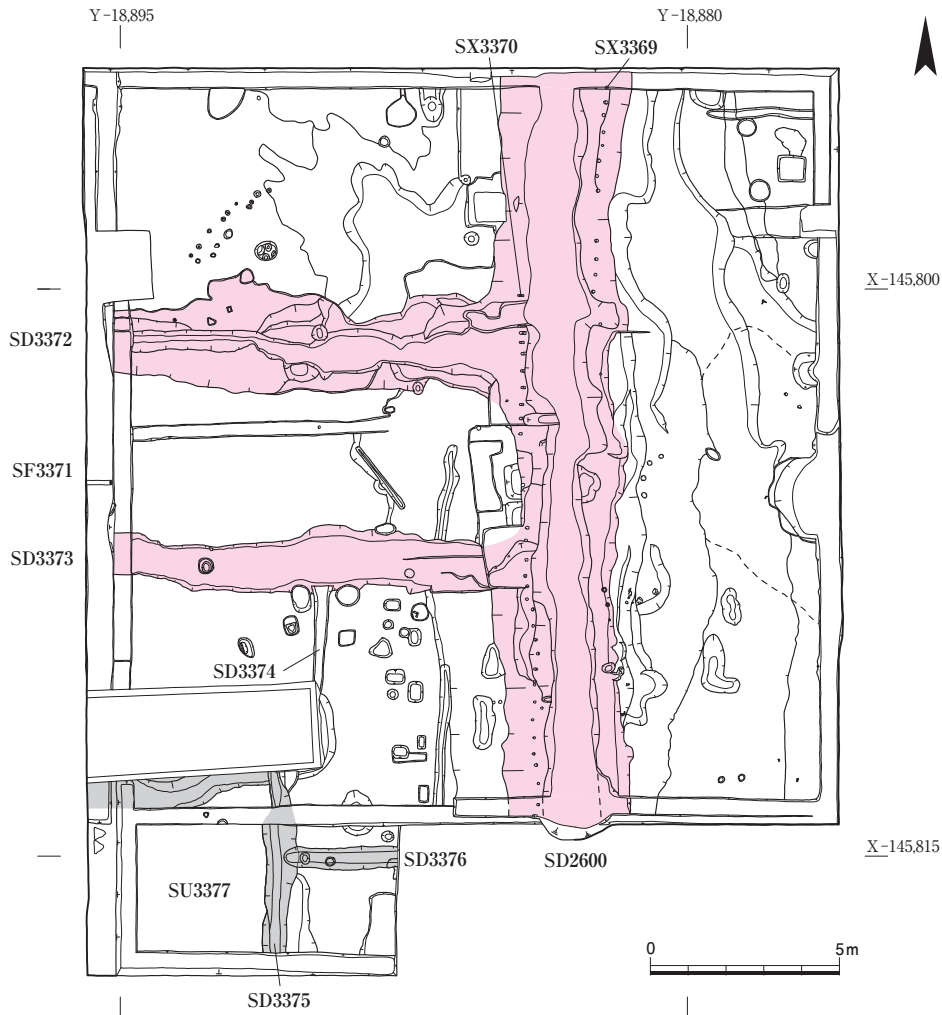
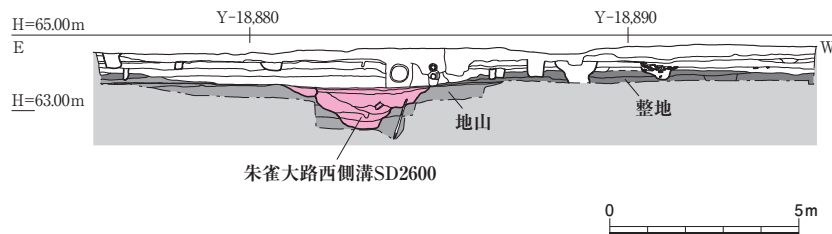


図203 第552次調査南区遺構図 1:200



朱雀大路西側溝SD2600

図204 第552次調査南区南壁土層図 1:200

ら接続する素掘りの南北溝。約2.5mにわたって検出した。幅は約0.5m、深さは約0.1m。遺構検出面の標高は約64.1m。

**雨落溝SD3375** 調査区西南隅で逆L字型に屈曲する素掘溝。南北約5.4m、東西約5.0mにわたって検出した。南北溝の幅は0.6~0.9m、深さは約0.2m、東西溝の検出

幅は1.0m以上、深さは約0.2m。遺構検出面の標高は64.0~64.1m。溝内には瓦類が堆積する。築地塀ともなう雨落溝と考えられる。なお、築地塀本体の痕跡は残存していないが、SD3375、および朱雀大路西側溝SD2600や後述の瓦溜SU3377で出土した多量の瓦類の存在から、本来は築地塀が存在したと想定できる。

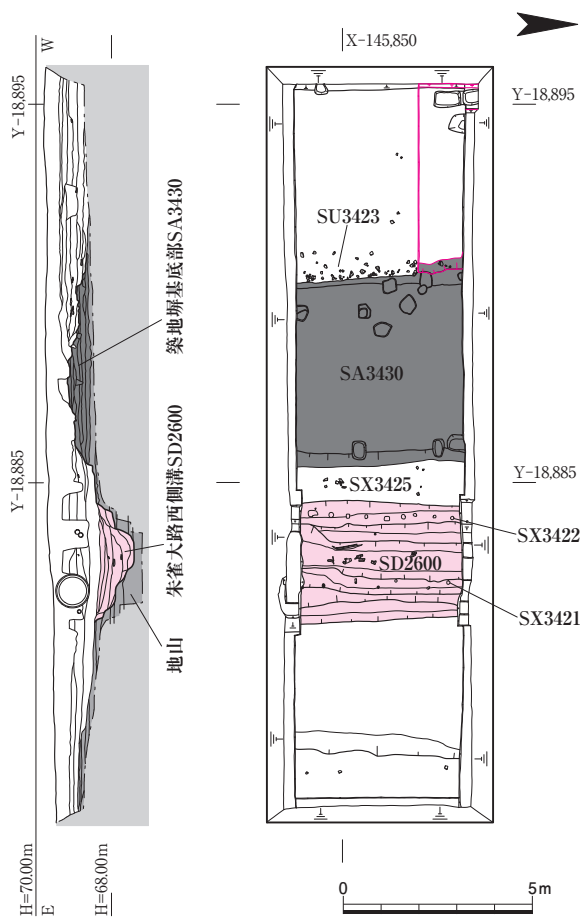


図205 第577次調査区遺構図・南壁土層図 1 : 200

**東西溝SD3376** 雨落溝SD3375の南北溝へ東から接続する素掘溝。約2.6mにわたって検出した。幅は0.5~0.6m、深さは約0.2m。遺構検出面の標高は約64.0m。築地塀にともなう暗渠の可能性がある。

**瓦溜SU3377** 調査区西南隅の南北約5.4m、東西約5mの範囲に多量の瓦類が出土した。瓦類は築地塀に由来するものと考えられる。

#### 第577次調査区

**朱雀大路西側溝SD2600** 南北約6mにわたって検出した素掘溝(図206)。幅3.1~3.4m、深さ1.0~1.1mを検出した。本調査区では、埋土は11層に細分され、そのうち第6層では瓦が多量に廃棄された状態で出土し、さらに第10層から木簡を含む木片・削屑が多量に出土した。木簡には奈良時代前半の年紀をもつものが含まれる。

**杭列SX3421** 朱雀大路西側溝SD2600の東岸上段において、千鳥状の配置で列状に検出した。8カ所の杭の痕跡のうち5カ所で木質の良好な遺存を確認した。杭の間

隔は0.5~0.9mとばらつきがある。

**杭列SX3422** 朱雀大路西側溝SD2600の西岸上段において、直線状に検出した。11カ所の杭の痕跡のうち4カ所で木質の良好な遺存を確認した。杭の間隔は0.3~0.5mで、杭列SX3421と比較すると、より規則的な間隔で配置されている。

**犬走りSX3425** 朱雀大路西側溝SD2600と築地塀基礎SA3430の間で確認した平坦面。幅約1.0m。

**築地塀基底部SA3430** SD2600、SX3425の西方において検出した築地塀基底部。内部で柱穴を2カ所で検出したが、築地との直接的な関わりについては不明である。調査区南北壁の断面では基礎部分を含めると幅4.8m~5.6m、高さ0.5~0.6mを検出した。

**瓦溜SU3423** 築地塀SA3430の西端に沿って検出した瓦溜。瓦類は築地塀に由来する可能性があるが、破片の大きさ、方向性などからみて、築地塀の屋根から直接落下したものと考えるににくい。また、明確な溝などの痕跡をとみなわない。

## 5 朱雀大路西側溝・二条大路南側溝廃絶後の遺構

### 第566次調査西区

**土坑SK3398** 調査区東端で検出した土坑。二条大路南側溝SD4006の南岸を壊す。径約1.7mの円形の平面をもち、深さは約0.8m。底面は砂層に達しており、井戸の可能性はある。埋土の上層には瓦溜が認められ、奈良時代後半の土器を含む。

### 第552次調査北区

**土坑SK3362・3363** 調査区北部で検出した2基の土坑。坪内道路SF3358の北側溝SD3359の東側部を壊す。SK3362の径は東西約3.3m、南北約3.0m、深さは0.1~0.2m。SK3363は東西約5.8m、南北約3.2m、深さは0.1~0.3m。遺構検出面の標高は63.9~64.2mである。いずれも詳細な時期は不明であるが、SK3362の埋土より黒色土器碗A類の破片が出土した。

**東西溝SD3361** 調査区北部の土坑SK3362・3363の下層において検出した素掘溝。長さ約8.3mにわたって検出した。幅は0.6~1.1m、深さは0.1~0.3m。溝底面の標高は63.6~63.9mである。北西方向から屈曲して東に向かいSD2600と合流する。この合流点では、南北方向に並んだ杭4本を検出した。杭はいずれも径10cm前後

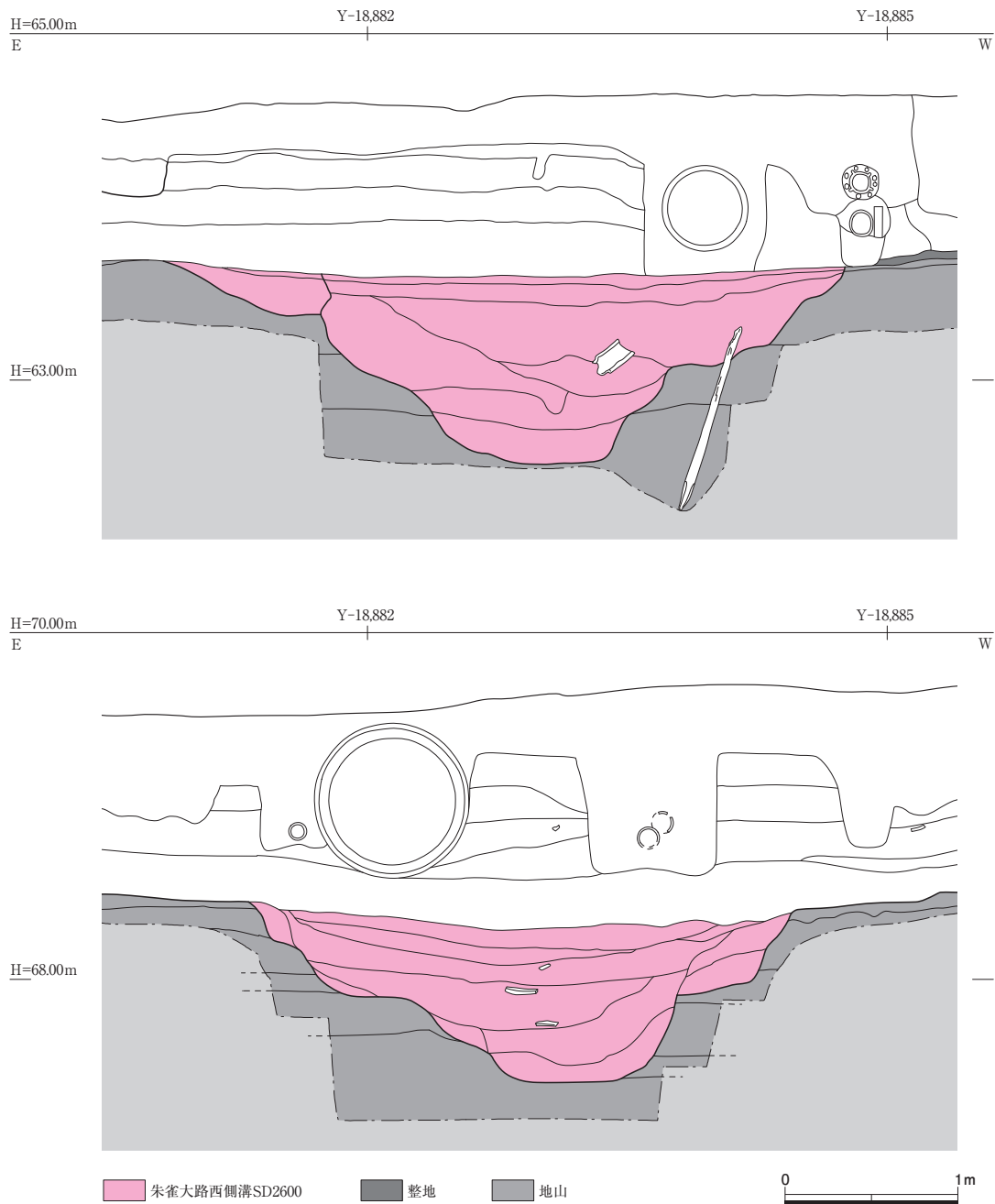


図206 第552次調査南区南壁(上)・第577次調査区南壁(下) 朱雀大路西側溝SD2600土層図 1:40

で、南北の溝肩付近に1本ずつ、溝底に2本が打ち込まれている。

**東西溝SD3360** SD2600と接続する素掘溝。約2.2mにわたって検出した。西側の底面は円形に窪む。検出幅は

0.6~1.1m、深さは0.1~0.3m。遺構検出面の標高は63.9~64.1m。SD2600との合流部では、北肩付近に打ち込まれた径5cmの杭1本を検出した。

## 6 時期不明の遺構

**土坑SK3364** 調査区西南部で検出した東西約1.1m、南北約1.1m、深さ約0.8mの円形土坑。土坑の壁面・底部周辺の埋土に炭層を含む。遺物はほとんど出土せず、時期や性格は不明である。

(丹羽崇史・番 光／文化庁・芝康次郎・庄田慎矢・浦 蓉子)

## 7 出土遺物

### 土器・土製品

一連の調査によって多数の土器・土製品が出土した。以下、調査区ごとに様相を述べる。

**第578次調査区・第566次調査東区出土土器・土製品** 第578次調査区からは整理用コンテナ4箱分、第566次調査東区からは整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代を中心とした土師器・須恵器のほか、墨書土器・漆附着土器・製塩土器・硯・土馬などが出土している。また古墳時代の土器や埴輪も出土している。朱雀大路西側溝SD2600B出土品を中心に図示する(図207・208)。

図207の1～8は第578次調査区のSD2600B出土。2は砂層、1・4・6は灰色砂層、7は灰色粘土層、3・5・8は黄褐色粘土層からの出土である。1・2・3・4は土師器。1は盤A。内面はヨコナデののち二段螺旋暗文が施され、外面はヘラミガキがみられる。2は杯A。口縁部内面に放射状暗文、底部に螺旋暗文を施す。外面は底部にヘラケズリ、口縁部付近にヘラミガキを施すb1手法による。3は皿A。4は杯Aの底部で、外面に五芒星のようなものを墨書する。内面には螺旋暗文を確認できる。5～8は須恵器。5・6は杯B蓋。5は内面に墨痕がみられ、転用硯である。7は杯B。8は壺M。内面に漆が附着する。外面の体部下半には「十」らしきヘラ書きがみられる。底部はヘラ切りによる。

以上のように、第578次調査区のSD2600Bからは奈良時代前半(1・2・4・5・6)から後半(3・7・8)にかけての土器が出土している。なお第578次調査区のSD2600Aからは図化可能な土器は出土していない。

図208の1～10は第566次調査東区のSD2600出土。そのうち、1・5・6・8はSD2600A、8はSD2600B、そのほかはSD4006との合流部以南のSD2600出土。1・

2・3は土師器。1は杯C。内面底部に放射状暗文を施す。2は碗A。外面調整はc3手法による。3は高杯Aで、外面に墨書を施す。「羹」と記された可能性がある。4～8は須恵器。4は甕A。黄土が施された痕跡があり、猿投窯産の可能性がある。5・6は杯B蓋。6は内面に墨痕がみられ転用硯である。7は杯B。底部に墨痕があり転用硯である。8は碗A。内面には火襷の痕跡があり、外面の体部下半から底部にかけて丁寧なロクロケズリを施す。9は土馬。10は蹄脚円面硯の脚部。

このように第566次調査東区のSD2600からは、奈良時代前半(3・5・6・7)、奈良時代半ばごろ(1)、奈良時代後半(2)にかけての土器が出土している。

**第566次調査西区出土土器・土製品** 調査区からは整理用コンテナ12箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代を中心とした土師器・須恵器のほか、黒色土器・墨書土器・緑釉陶器・製塩土器などが出土している。二条大路南側溝SD4006、南北溝SD3400から出土した土器を図示する(図209)。

1・3・4・5は二条大路南側溝SD4006出土、それ以外は南北溝SD3400出土である。1は土師器杯B。胎土に1mm前後の砂礫を含む。2は黒色土器A類。内面に丁寧なミガキを施す。3～5は須恵器。3は壺Gの底部。外面底部には糸切り痕跡がみられる。4は肩が張り高台が付く壺M。5は杯Bで外面底部に「厨」の墨書がみられる。6は緑釉陶器碗。緑釉単彩で全体に釉薬を施す。黄白色の緻密な胎土で釉薬に斑があり、奈良三彩の可能性がある。7は土師器壺Bの人面墨書土器。外面に縦方向に3本の曲線が描かれ、眉や目などを表現した可能性がある。また、上方の曲線の上下には円形の突起を貼り付ける。

これらの土器類は、いずれも奈良時代後半の特徴を有するものと考えられる。

**第552次調査北区出土土器・土製品** 調査区からは整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代を中心とした土師器・須恵器のほか、古墳時代の須恵器・土師器・埴輪、黒色土器・製塩土器・土馬などが出土している(図210・211)。

図210-8はSK3362出土、それ以外はSD2600出土である。1～7は土師器。1は皿B蓋。外面は丁寧なヘラミガキを施す。2・3・4は皿A。2は外面全体にヘラケ

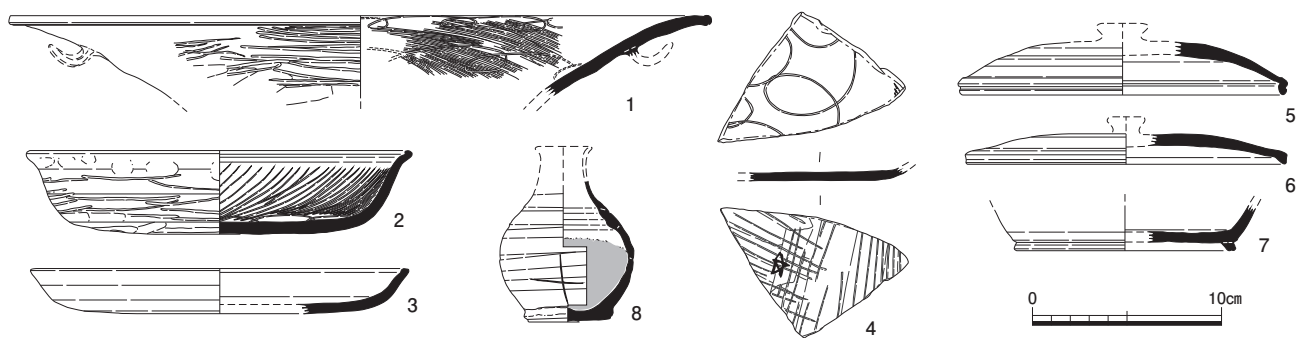


图207 第578次調査区出土土器 1:4

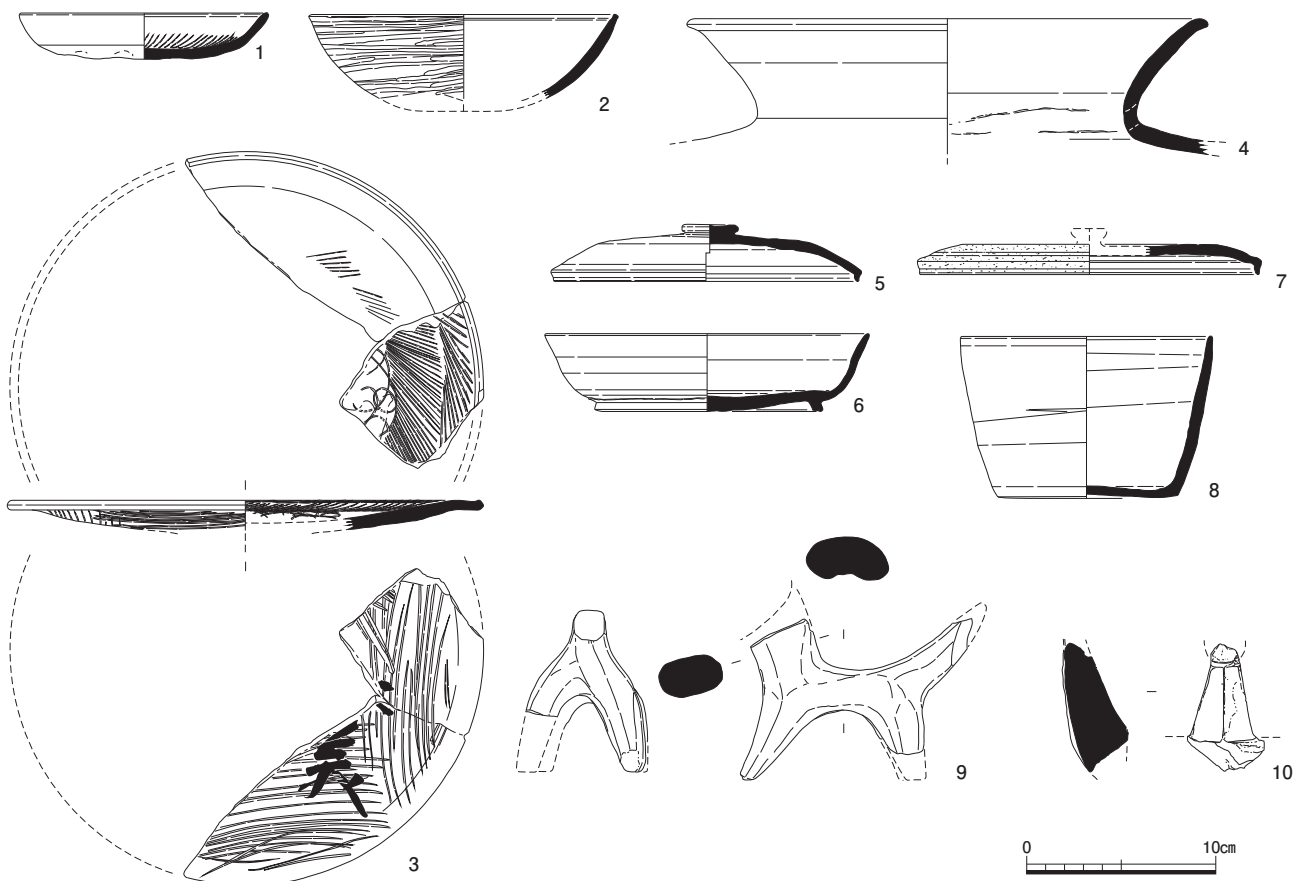


图208 第566次調査東区出土土器・土製品 1:4

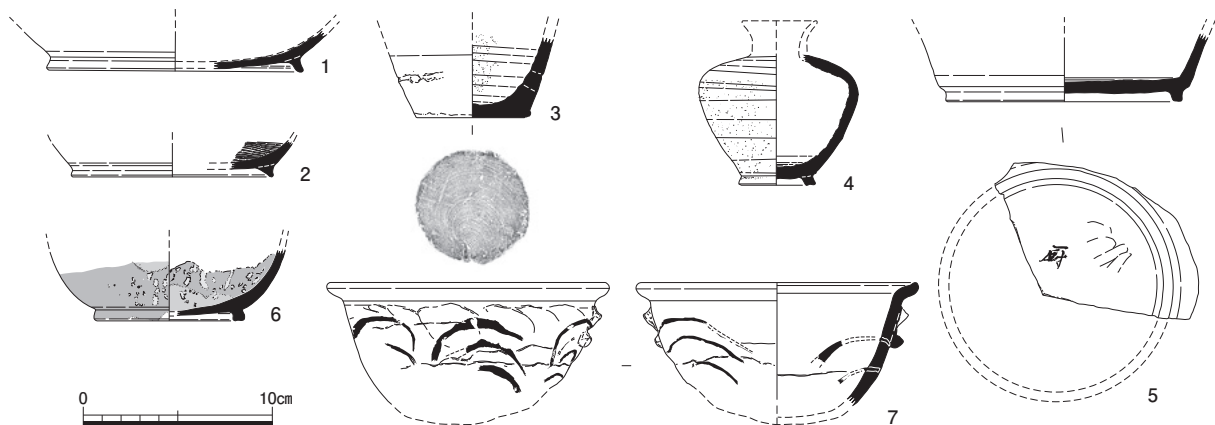


图209 第566次調査西区出土土器 1:4

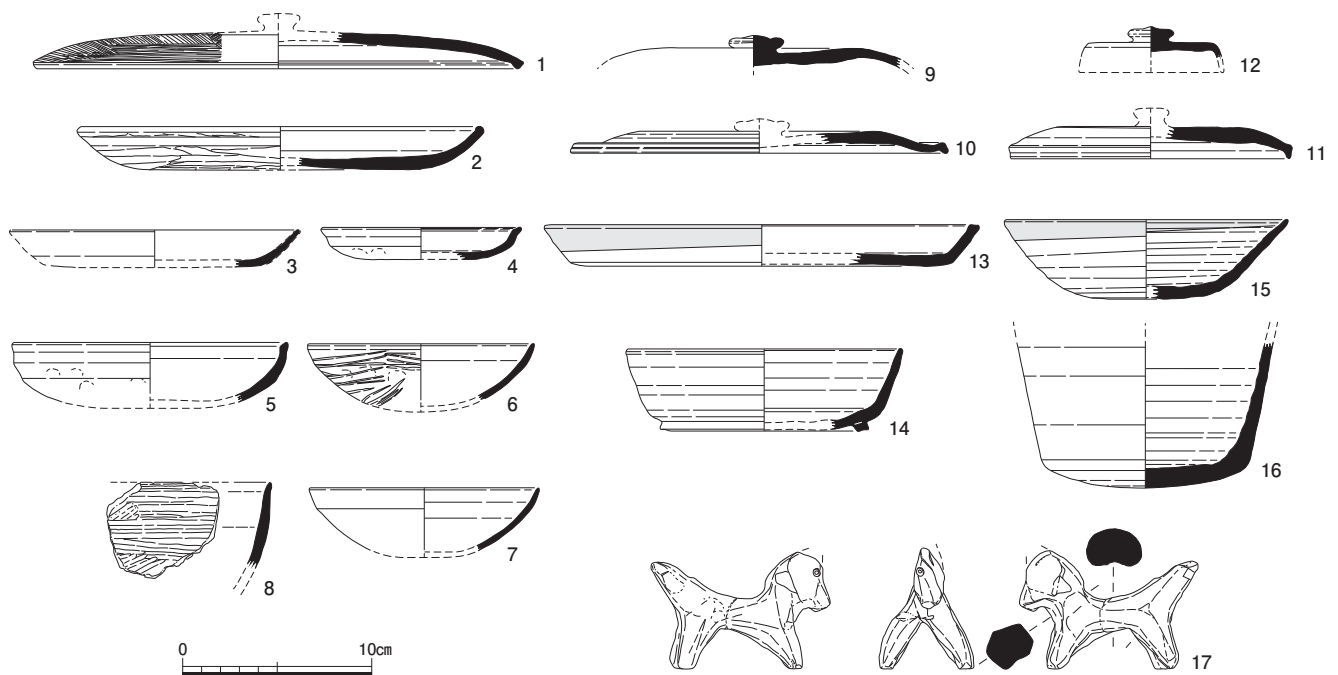


図210 第552次調査北区出土土器・土製品 1 : 4

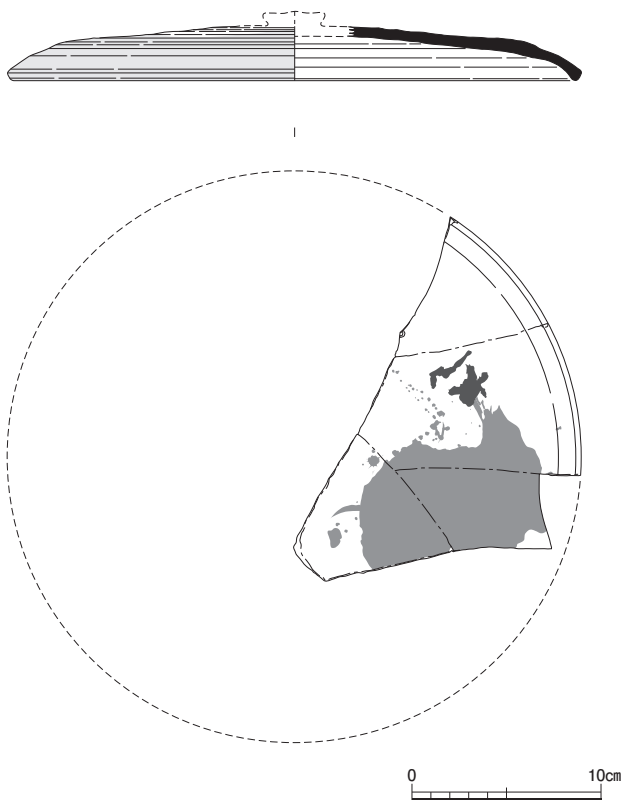


図211 第552次調査北区・第578次調査区SD2600出土須恵器 1 : 4

ズリを施すc0手法による。5は杯C。6・7は椀A。6の外表面はc3手法。8は黒色土器椀A類。内面に丁寧なミガキを施す。9～16は須恵器。9・10・11は杯B蓋。12は小型壺蓋。13は皿C。口縁部内外に重ね焼き痕跡が

残る。14は杯B。15は杯Aだが、この時期のものにしてはやや口縁部の開きが大きい。16は鉢E。17は土馬。ほぼ完形で目や耳が表現される。

図211は須恵器杯B蓋。第552次調査北区のSD2600砂層出土蓋と第578次調査区SD2600B灰色砂層出土破片とが接合したものである。蓋内面に墨痕がみられる転用硯で、墨溜りで筆先を揃えたと考えられる痕跡が残る。また、いずれの破断面にも墨の付着はなく、摩滅痕跡もみられないため、本資料は硯として用いたのち、廃棄時もしくは廃棄後に破断したものと考えられる。

第552次調査北区のSD2600からは奈良時代後半を中心とした土器がみられる。また、坪内道路北側溝SD3359を壊す土坑SK3362からは平安時代に下る黒色土器椀A類が出土している。

**第552次調査南区出土土器・土製品** 調査区からは整理用コンテナ13箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代を中心とした土師器・須恵器のほか、製塩土器・漆附着土器などが出土している。またSD2600砂層からは古墳時代の須恵器・土師器・埴輪も一定量含まれる。SD2600出土土器を図示する(図212)。

1～8は土師器。1は皿蓋。外面は丁寧なヘラミガキを施す。2～6は杯A。2・3の内面には螺旋、一段放射の暗文、外面はヘラミガキを施す。4は外面底部をヘラケズりするb0手法、6は外面全体をヘラケズりするc0手法を施す。7・8は甕A。9～19は須恵器。9～

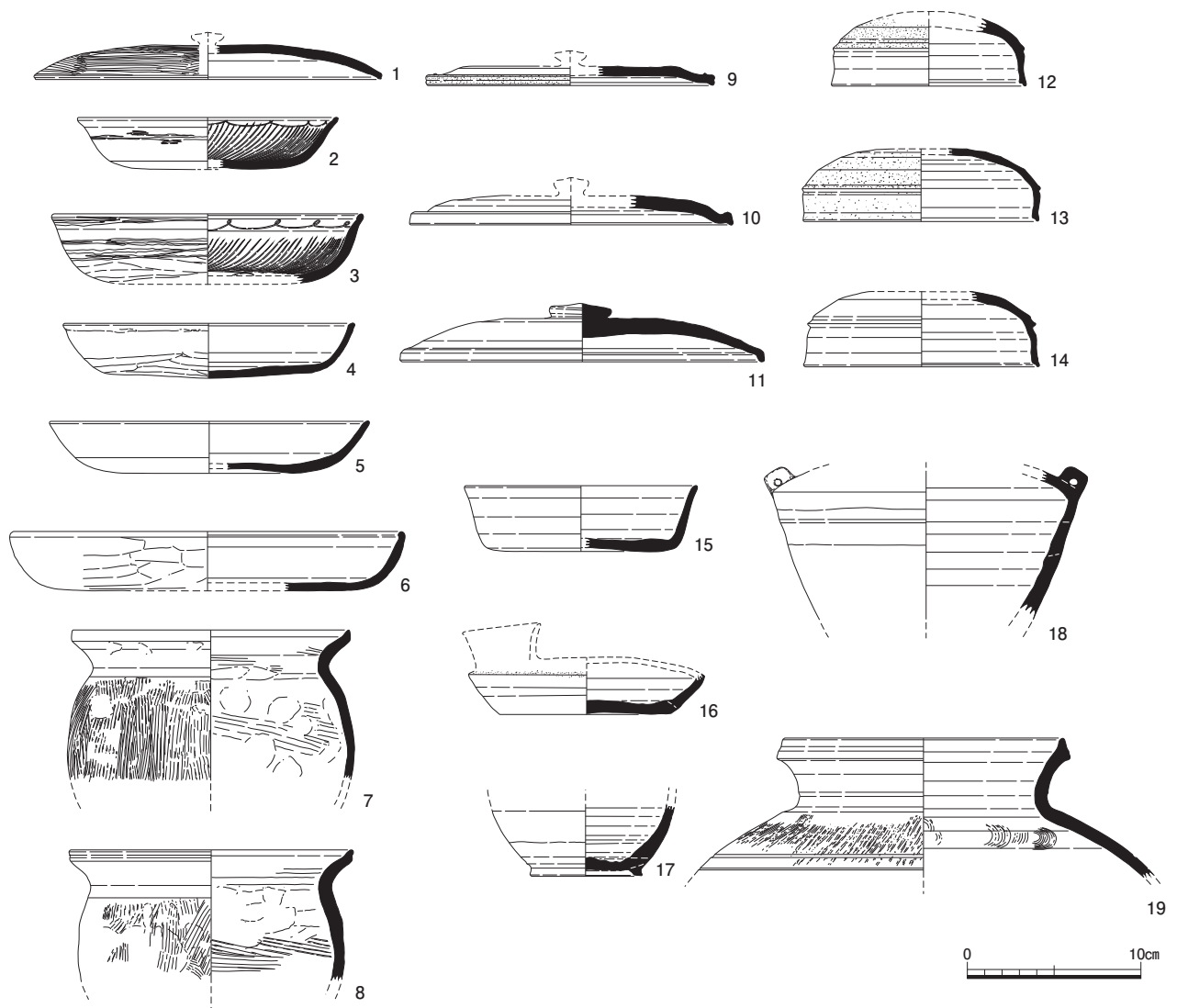


図212 第552次調査南区出土土器 1:4

11は杯B蓋。11は厚手で、胎土に2mm以下の砂礫を多数含む。12~14は古墳時代の杯H蓋。6世紀前半ごろと考えられる。15は杯A。内面にススの痕跡を確認でき、灯明器として用いられたものとみられる。16は器高が低い平瓶。17は長頸瓶の底部と考えられる。18は双耳瓶の体部。19は甕B。叩きののちに全体的にロクロナデを施し、外面の叩き痕跡と内面に同心円状のあて具痕跡を磨り消している。

以上のように第552次調査南区のSD2600からは、古墳時代から奈良時代後半までのさまざまな時期の土器類がみられる。

**第577次調査区出土土器・土製品** 調査区からは整理用コンテナ4箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代を中心とした土師器・須恵器のほか、陶硯・製塩土器・土馬などが出土している。朱雀大路西側溝SD2600からの

出土品を中心に図示する(図213)。1~5はSD2600からの出土品。そのうち、1は第7層、2・3・5は第6層(うち5は瓦集中部)、4は第4層出土。6は包含層からの出土である。1・2は土師器。1は皿A。内面には見込みに螺旋、一段放射の暗文を施す。2は土師器碗A。外面全体をヘラケズりするc0手法である。3~5は須恵器。3は杯B蓋。内面に墨跡がみられ、転用硯である。4・5は杯B。体部は底部との境で緩やかに立ち上がる。6は蹄脚円面硯の脚部。

以上のように、第577次調査区のSD2600埋土からは奈良時代前半の土器(1・3~5)とともに、奈良時代後半の土器(2)も含む。ほかの調査区と同様に、朱雀大路西側溝SD2600が奈良時代を通じて存続していた可能性を示唆する。

(丹羽)



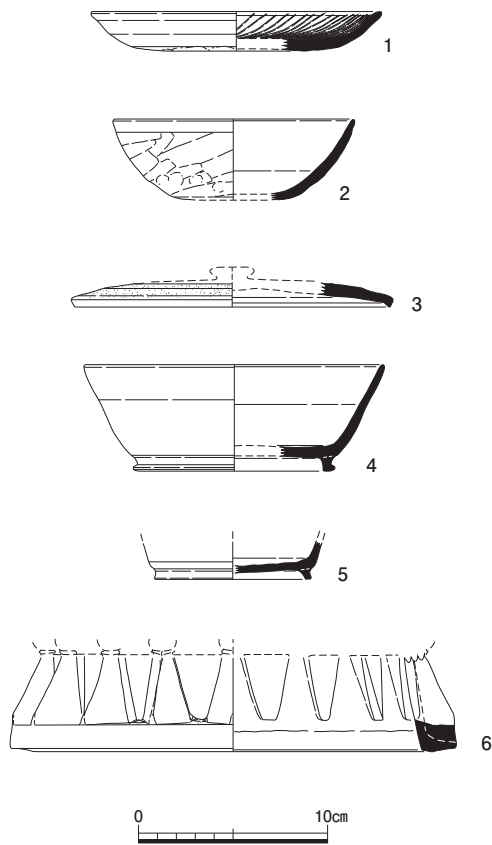


図213 第577次調査区出土土器 1 : 4

## 瓦 類

第552次・第566次・第577次・第578次調査の軒瓦のほとんどは朱雀大路西側溝SD2600からの出土品である(図214・表1～6)。第552次調査北区、第578次調査区のSD2600からは藤原宮式の軒瓦のみ、第566次調査東区のSD2600からは藤原宮式の軒瓦(1・2・4)と水波文罫1点が、第552次調査南区および第577次調査区のSD2600からは藤原宮式のほか、瓦編年Ⅲ-2期の6133K、Ⅱ-2期以降の6135、Ⅲ-2～Ⅳ-1期の6316B・D(7・8)、Ⅲ-2期の6710A・C(10・11)が出土した。また、第552次調査北区の東西溝SD3360と第552次調査南区の三条条間北小路北側溝SD3372からはⅢ-2期の6711A(12)が出ている。

第566次調査西区では二条大路南側溝SD4006と南北溝SD3400からの出土が大半を占める。多くが藤原宮式の軒瓦(3・5・6)だが、Ⅳ-1期の6316S(9)も認められる。この6316Sについては、隣接する第448次調査区からまとまって出土している。なお、西一坊坊間東小路

西側溝SD2641からは多数の丸・平瓦が出土しているが、軒瓦は型式不明のものを1点確認したに過ぎない。

第578次調査区および第566次調査東区の軒瓦は朱雀門あるいは平城宮南面築地大垣に葺いたものであろう。第552次調査北区の軒瓦は使用場所の比定が難しい。一方、第552次調査南区および第577次調査区の軒瓦は右京三条一坊二坪の東面、北面に想定される築地塀の瓦と考えられる。藤原宮式が築地塀創建の軒瓦、それ以降の時期の軒瓦は補修瓦であろう。第552次調査南区・第577次調査区では、築地塀付近のSD2600埋土や瓦溜SU3377・SU3423からも多量の瓦が出土している。

各調査区から出土した丸瓦、平瓦を1㎡あたりの量でみると、

第578次調査区	丸瓦0.07kg/㎡	平瓦0.13kg/㎡
第566次調査東区	丸瓦0.13kg/㎡	平瓦0.21kg/㎡
第566次調査西区	丸瓦1.00kg/㎡	平瓦2.21kg/㎡
第552次調査北区	丸瓦0.10kg/㎡	平瓦0.22kg/㎡
第552次調査南区	丸瓦0.62kg/㎡	平瓦1.57kg/㎡
第577次調査区	丸瓦0.24kg/㎡	平瓦0.90kg/㎡

となり、右京三条一坊八坪を含む第566次調査西区と、右京三条一坊二坪にあたる第552次調査南区、第577次調査区は瓦の出土量が多い。これらもそれぞれの坪の築地塀の瓦であろう。(今井晃樹・林 正憲)

## 木 製 品

おもに朱雀大路西側溝SD2600から、人形等の祭祀具を中心として、容器、服飾具、編籠が出土している。なお、土壌の水洗選別作業が未完のため、詳細な点数は不明である。以下、掲載資料について個別に記載する。出土遺構は特に断りがないかぎり、SD2600である。

**祭祀具** 図215-1～16は人形。すべて短冊状の板材に切り込みを入れて身体を表現する正面全身人形である。これらは、頭部を円頭形、圭頭形、方形に整形して、頸部をV字形に切り欠き、両側面から切り込みを入れて両腕を表現し、下端の木口から切り欠きを入れて両脚をあらわすという点で共通するが、頸部の切り込みの2辺の長さがほぼ等しい撫で肩状のもの(1・7～9・11～13・15・16)と、頬部分が長く肩が短いかり肩状のもの(2～6・10・14)とに分けられる。後者には腰部にV字形の切り込みを入れるものがある(2～4)。1・9・11・13には墨書により眉、目、鼻、口を簡便にあらわすが、2

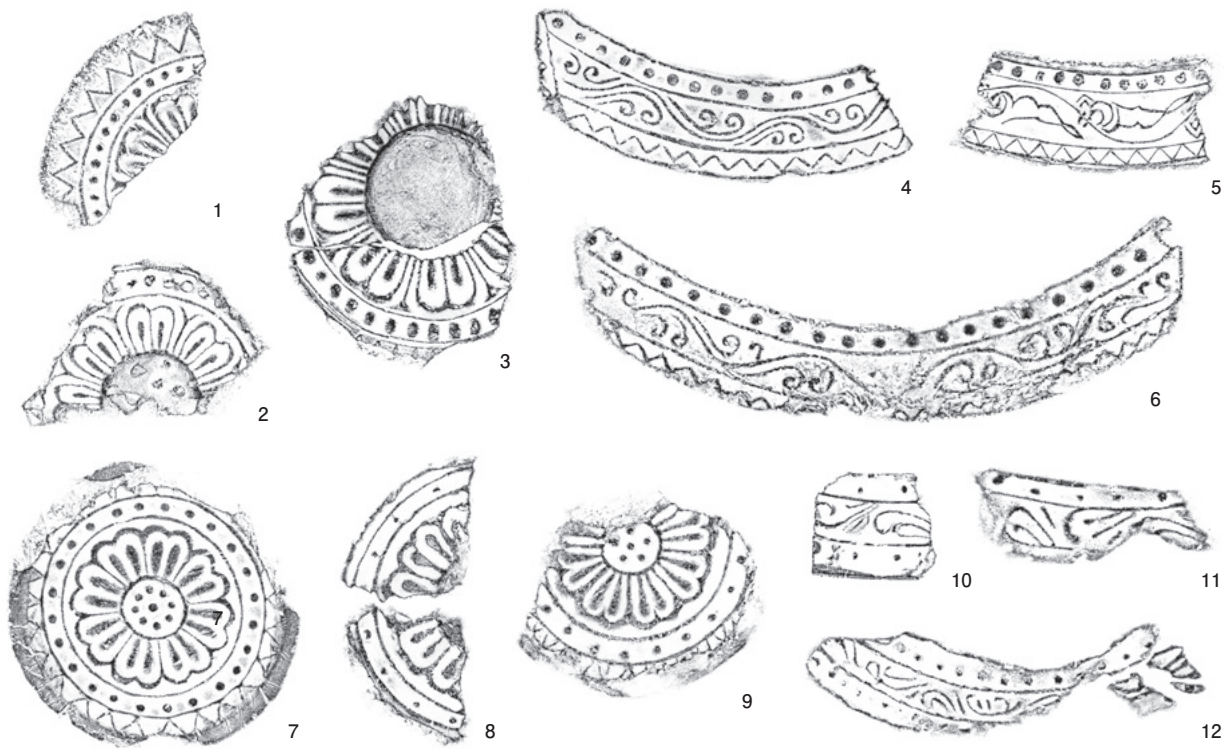


図214 第552次・第566次・第577次・第578次調査出土軒瓦 1 : 4

～8には口から派生する髭と思しき複数の直線や胴部にいくつかの波状線や直線を描くものもある。2～4の3枚と5・6の2枚はそれぞれ形状、木取り、墨書の類似から同工品と考えられる。2～4は板目材を用いて、頭部に顔の輪郭線を描き、その中に目・鼻・口・髭が墨書され、胴部にいくつもの波状線や直線が描かれる。2には頸から腹部にかけて描いた波状線の下に「口」と書き、その下に数本の直線を引いて、腰部の切り込みの下に再び波状線を描く。5・6は、目のつまった柁目材を用いて大きく作られた頭部に、目、鼻、口に刻線と墨書がなされ、さらに額と口周りに髭とみられる墨書が加わる。人形は被の際に複数枚を組み合わせて使用すると考えられているが<sup>3)</sup>、2～6の5枚はSD2600と二条大路南側溝SD4006との合流部の南3mの地点からまとまって出土しており、それぞれセットで用いられたことを示す事例といえる。なお、図208-9の土馬も同位置から出土した。

17は舟形。やや厚みのある棒状の板目材を用いて、上下両端にやや丸みを持たせて船首と船尾を表現し、表面は平滑にしたのち大部分を深さ5mmほど刮りこみ、裏面は断面弧状に整形する。左側面を欠損する。表面平坦部

の右下には文字とみられる墨書があり、木簡の再加工品と考えられる。18～24は斎申。すべて柁目板を素材として、上下端を斜めに裁断する。表面は丁寧な面取りされるが、裏面は割裂面をそのまま用いる。断面は扁平な長方形(18・19・21・24)と台形を呈するもの(20・21・23)の二者があり、断面台形のものには上端中央から切り込みが入るものがある。これらはすべて第552次調査南区のSD2600南端部で出土した。

**容器** 図217-25は曲物底板。板目材を利用して、表裏両面を平坦に加工する。周縁の3か所に木釘穴がみられ、うち1か所に木釘が残存する。

**紡織具** 26は紡錘車か。広葉樹の板材を円形に整形し、中央部に径0.8cmの円孔を穿つ。

**服飾具** 27・28は横櫛。いずれも平面長方形のもので、肩を丸くおさめるもの(27)と角張るもの(28)がある。27は両端が、28は片端が欠損する。27は残存幅7.3cm(3cm間に歯が30本)、高さ3.8cm、厚さ0.5cmで、28は残存幅8.3cm(同24本)、高さ4.3cm、厚さ1.1cm。二条大路南側溝SD4006出土。

図216は草鞋。周囲と中央に2本の縄紐を芯として、それに直交するように藁をわたす。上端にはヒモないし

表31 第578次調査区出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6233	A	1	6641	C	1	丸瓦 (ヘラ書)	1
6274	Ab	1		E	2	鬩斗瓦	1
	A	1		F	2	用途不明道具瓦	1
6275	?	4	6642	A	1		
6279	A	1	6646	D	1		
	B	1					
6281	?	1					
藤原官式		2					
時代不明		1					
軒丸瓦計		13	軒平瓦計		7	その他計	3
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩
重量		22.955kg			45.244kg	0	0
点数		187			796	0	0

表32 第566次調査東区出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6275	A	1	6641	C	3	面戸瓦 (藤原?)	1
	B	1	6646	C	1	水波文磚	1
型式不明(奈良)		1	藤原		1		
時代不明		1	型式不明(奈良)		3		
軒丸瓦計		4	軒平瓦計		8	その他計	2
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩
重量		47.319kg			75.217kg	0.062kg	0
点数		299			925	1	0

表33 第566次調査西区出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6276	C	2	6641	Ab	1	丸瓦 (ヘラ書)	1
6316	S	4		A	1	隅切平瓦 (奈良)	2
藤原		8		C	2	面戸瓦	2
型式不明(奈良)		5		E	1	(奈良)	4
時代不明		2	6646	A	1	磚?	1
			6710	A	2	凝灰岩	1
			藤原		1		
			型式不明(奈良)		4		
			時代不明		1		
軒丸瓦計		21	軒平瓦計		14	その他計	11
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩
重量		324.581kg			716.645kg	1.069kg	17.992kg
点数		2432			8968	3	35

カエシと考えられる太めの紐が、下方には芯縄とみられる2本の紐が残存する。左右のチ(乳)は認められない。上端の弧の頂部が中軸より左寄りであることから右足用と考えられる。出土時はほぼ原形を保っており約22cmほどが残存していたが、非常に脆弱で、取り上げ時とその後のクリーニング時に欠損した部分がある。残存長17.6cm、残存幅10.9cm。

表34 第552次調査北区出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6233	Ac	1	6647	A	1	丸瓦 (ヘラ書)	1
6275	B	1		B	1	瓦製円盤	1
6316	B	1		G	1		
型式不明(奈良)		2	6711	Ab	1		
				A	1		
				型式不明(奈良)	2		
				時代不明	3		
軒丸瓦計		5	軒平瓦計		10	その他計	2
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩
重量		38.207kg			77.13kg	9.725kg	0
点数		269			1036	6	0

表35 第552次調査南区出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6133	Ka	1	6643	B	1	切鬩斗瓦	1
	K	1		C	1	鬩斗瓦	3
6135	?	1	6664	N	1	面戸瓦	2
6233	Aa	1	6710	A	1	用途不明道具瓦	1
6274	Ab	1		C	1	磚	1
6275	A	2	6711	Ab	1		
	B	2		型式不明(奈良)	1		
6284	E	1		時代不明	2		
6316	B	2					
	D	2					
型式不明(奈良)		9					
時代不明		2					
軒丸瓦計		25	軒平瓦計		9	その他計	8
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩
重量		274.219kg			688.97kg	2.994kg	0
点数		2440			10819	4	0

表36 第577次調査区出土軒瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6275	A	1	6641	C	1		
6316	B	1					
軒丸瓦計		2	軒平瓦計		1	その他計	0
	丸瓦		平瓦			磚	凝灰岩
重量		28.914kg			109.101kg	0.162kg	0
点数		298			1696	1	0

その他 図217-29は加工痕のある棒状品。心持材の上端を削りこむ。下半を欠損する。残存長6.6cm、径1.6cm。

(芝)

### 大型木製品

橋脚 SX3355では、橋脚を5基、その痕跡を2基検出した。検出した橋脚のうち、2点を取り上げた(図220)。1は、長さ1024mm、幅158mm、厚さ80mmの、年輪

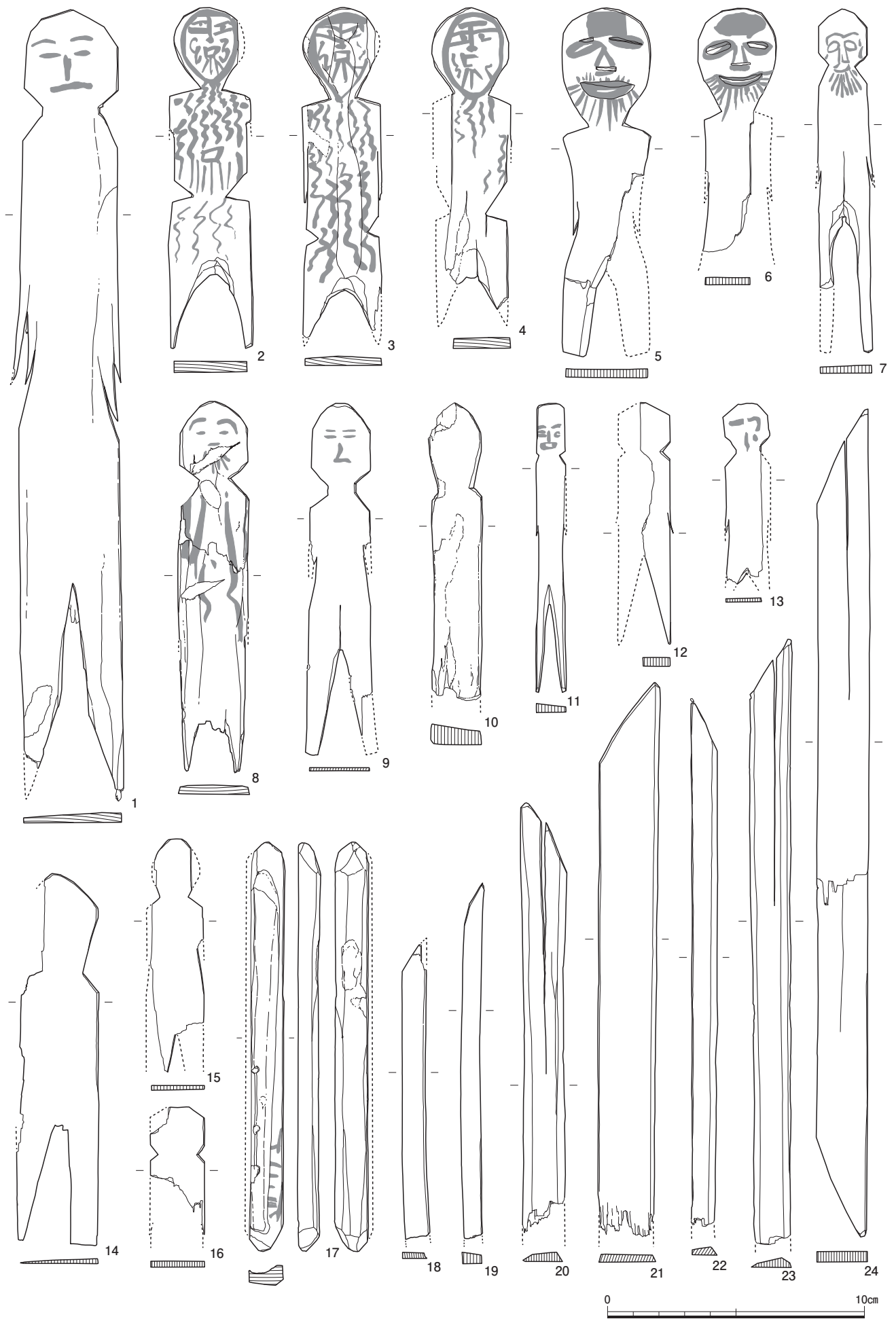


図215 朱雀大路西側溝SD2600出土木製品 1 : 2



図216 朱雀大路西側溝SD2600出土草鞋 1:2

割の板目の五平材である。下端部は先端から285mm付近より、ヨキで五平断面の角を落とし、杭状にとがらせる。刃痕の最大幅は59mmである。側面は下端より349mm付近から上部は腐食が進み、上端を欠損している。ヒノキ材。2は、長さ612mm、幅191mm、厚さ61mmの、年輪割の板目の五平材である。下端部は側面を先端から406mm付近より、ヨキで落とし、さらに部分的に五平断面の角を落として、杭状にとがらせる。刃痕の最大幅は31mmである。この加工痕跡より上部は腐食が進み、上端を欠損している。ヒノキ材。なお樹種同定は、高橋敦氏（パリオ・サーヴェイ株式会社）による。（鈴木智大）

#### 銭貨・金属製品

**銭貨** 図218-1~12はすべて朱雀大路西側溝SD2600から出土した銭貨。現状では和同開珎5枚、萬年通寶2枚、神功開寶5枚の計12枚を確認している。計測値は表37を参照されたい。

**金属製品** 13・14は銅人形。厚さ約0.3mmの銅薄板を短冊状に裁断し、両側片2か所にV字状の切り込みを入

れ、上端の両角を断ち切る。下端については、13はV字状に切り込み、14は直線状の切り込みを入れて、脚を表現する。いずれも顔の刻線は認められない。13は長さ13.1cm、最大幅1.0cm、14は復元長6.5cm、最大幅0.9cm。15は刀子の銅製鏝。一部に黒漆の痕跡が認められる。16は銅釘。頭部形状は円形で、断面形状も円形である。頭部径1.0cm、復元長9.0cm、身部径0.2cm。17は銅製丸軛。縦2.1cm、横3.4cm、厚さ0.9cmで、透かし孔は縦0.3cm、横2.2cmで表面および右側面の一部に黒漆が付着する。裏面には上部1本、下部両端に2本の計3本の釘を鑄出す。18は鉄製不明工具。上端は平坦で最大幅をもち、下方に向かって幅狭となる。残存長12.4cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmで断面は長方形。下端を欠損する。鑿か。19~21は鉄製の方頭釘。21は完形品で、19・20は下端を欠損する。頭部1.5~2.0cm四方、身部径は頭部下2cmのところでは0.7~0.8cm。金属製品のうち、21は南北溝SD3400、他はすべてSD2600で出土でした。

#### 石製品

図219は子持勾玉。親勾玉は断面楕円形で、頭部と尾部の端部が丸く整えられる。子勾玉は背・両脇部にそれぞれ独立して2個、腹部に1個削り出される。背・腹部の子勾玉が脇部のそれよりも一回り小さい。滑石製。2は有孔円板。厚さ0.2cmの板状素材の縁辺を研磨により円形に粗く整え、中央上寄りに径約0.2cmの小孔を穿つ。左半を欠損する。滑石製。3~17は白玉。径0.4~0.7cm、厚さ0.3~0.6cm、中央の孔は径0.1~0.2cmで大きさにばらつきがある。3のみ琥珀製でその他はすべて滑石製。これらの石製品の出土位置は第552次調査南区で、子持勾玉のみ朱雀大路西側溝SD2600上層の包含層から出土し、その他はSD2600埋土から出土したものである。子持勾玉は、古墳時代中期に出現し、藤原宮期まで残存することが知られる。これらの出土遺構の年代は8世紀以降と考えられるが、本例は、佐々木幹雄氏による分類のIIa類で、型式学的にみて7世紀までは降らない資料<sup>4)</sup>と考えられる。ここに提示した石製品がセット関係にあるものか判断としないが、白玉や有孔円板もこれに近い時期のものである可能性がある。したがって、これらは、朱雀大路周辺に存在していた古墳あるいは祭祀遺跡から何らかの理由で溝内およびその上方の包含層に混入したものと考えられる。（芝）

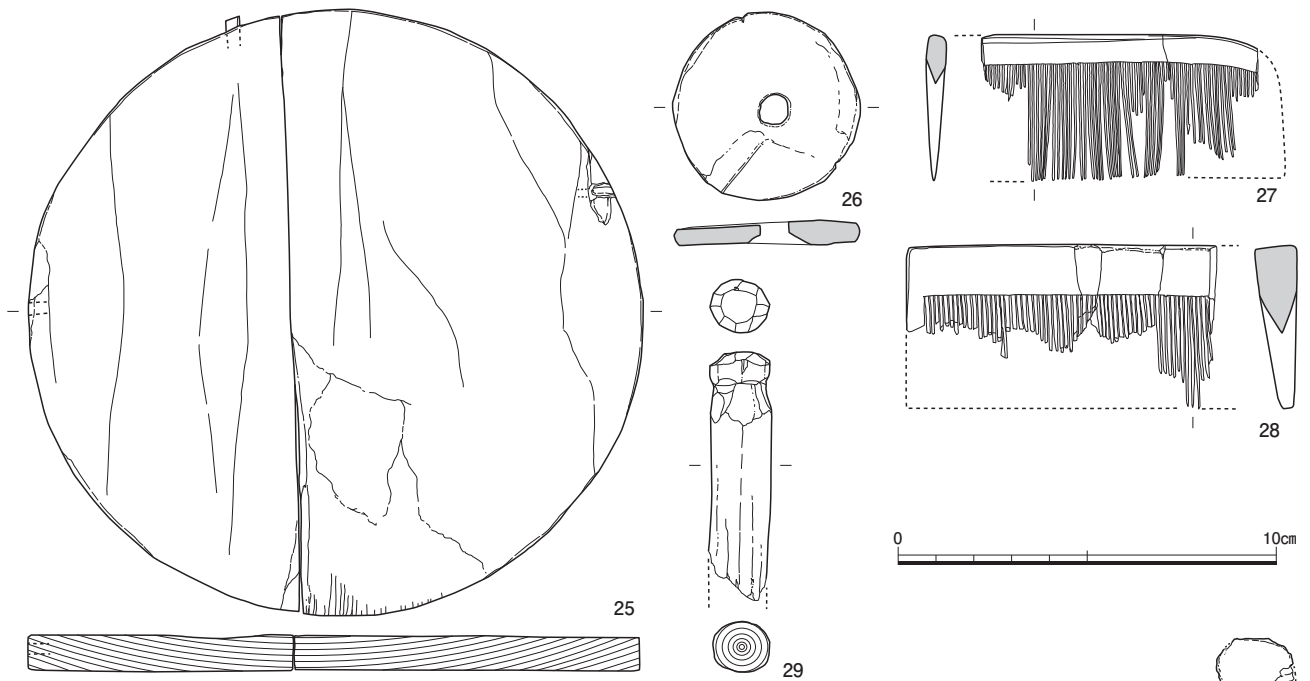


図217 朱雀大路西側溝SD2600・二条大路南側溝SD4006出土木製品 1 : 2

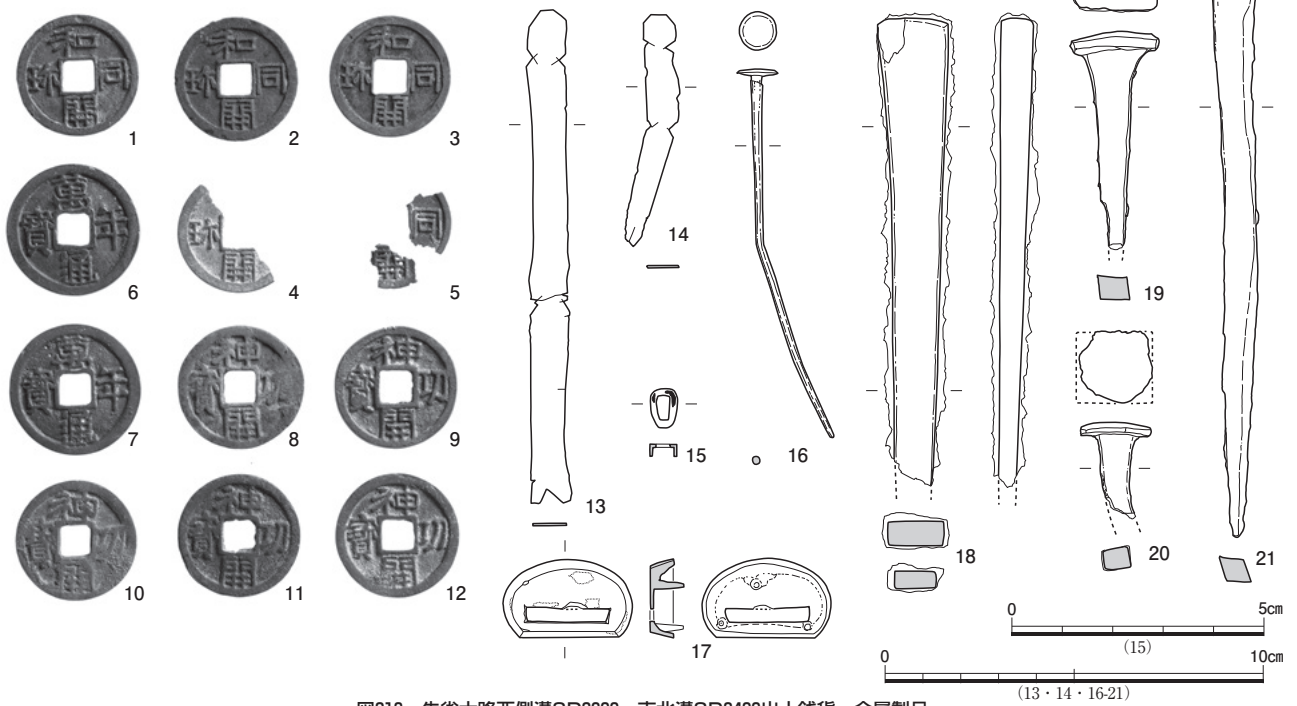


図218 朱雀大路西側溝SD2600・南北溝SD3400出土銭貨・金属製品

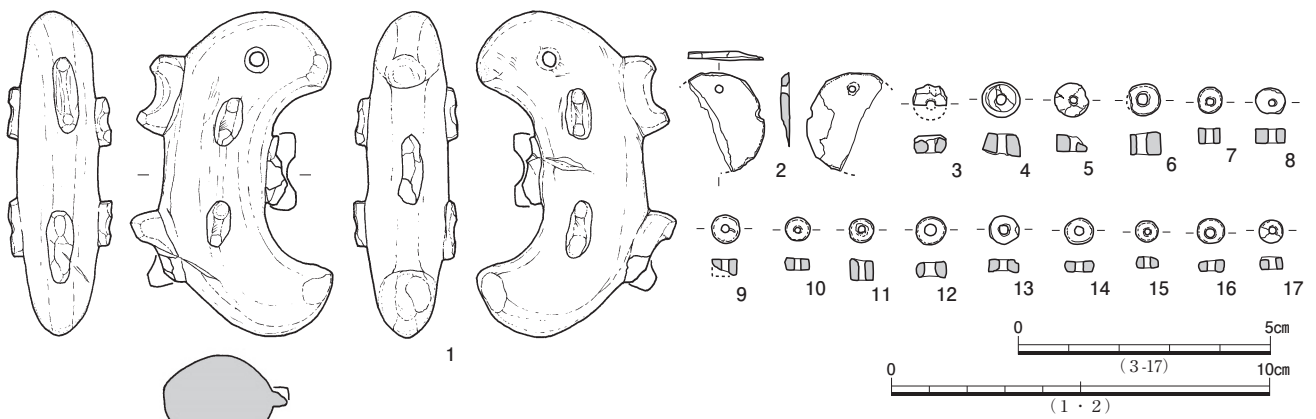


図219 朱雀大路西側溝SD2600ほか出土石製品

表37 朱雀大路西側溝SD2600出土錢貨計測表 mm・g

番号	銭種	G	N	g	n	T	t	W
1	和同	24.41	20.82	7.60	6.18	1.55	0.53	3.07
2	和同	24.82	20.49	4.73	6.23	1.34	0.40	2.73
3	和同	24.47	20.66	8.36	6.63	1.25	0.45	2.55
4	和同	-	-	-	-	1.28	0.48	1.37
5	和同	-	-	-	-	1.20	-	0.58
6	萬年	26.69	22.14	8.35	6.19	1.64	0.81	4.49
7	萬年	26.43	22.52	8.56	6.21	1.54	0.76	4.29
8	神功	25.12	19.73	8.15	6.35	1.41	0.75	4.02
9	神功	24.73	21.23	8.82	6.37	1.47	0.56	3.55
10	神功	24.25	20.68	8.52	6.05	1.38	0.78	3.93
11	神功	24.95	20.85	7.68	6.29	1.51	0.71	3.48
12	神功	24.84	21.10	8.88	6.09	1.38	0.80	3.08

G：外縁外径 N：外縁内径 g：内郭外径 n：内郭内径 T：外縁厚  
t：文字面厚 W：重量

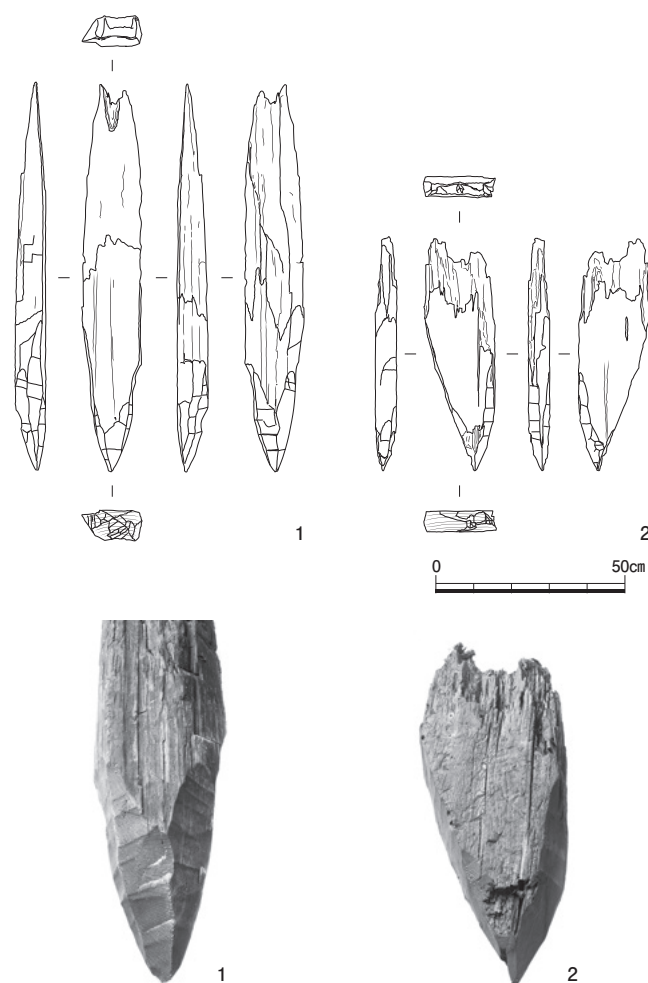


図220 SX3355出土橋脚 (写真1は先端部)

## 木 簡

2017年3月末現在で、221点(うち削屑158点)が出土している。内訳は、第552次調査で朱雀大路西側溝SD2600から35点(うち削屑10点)、第566次調査で二条大路を横断する南北溝SD3400から39点(うち削屑30点)・二条大路南側溝SD4006から41点(うち削屑35点)・SD2600Aから81点(うち削屑66点)・SD2600(SD4006との合流部より南)から1点(削屑なし)、第577次調査でSD2600から4点(削屑なし)、第578次調査でSD2600Bから5点(うち削屑2点)・SD2600AまたはBから15点(すべて削屑)である。現在も発掘現場から持ち帰った土を洗浄中であり、点数は今後増加する見込みである。

以下、主な木簡について述べる(図221・222)。1～8・10・11は、SD2600からの出土。1は、薨の進上状の断片。2は、備前国邑久郡からの庸米の荷札。郷里制下(靈龜3年(717)～天平12年(740)頃)の木簡である。3は、近江国慈賀(滋賀)郡大友郷(もしくは里)からの荷札。裏面の「□栗」は、物品名とみられるが不詳。あるいは、表面下部から続く貢進者名の末尾の可能性もあるか。4の「氷高命婦」は、実名不詳。1文字目の「氷」は比較的整った字形であるが、2文字目の「高」以下はかなり崩れている。同様の書きぶりの例として、『平城宮木簡二』2277号が挙げられる。6は、5片接続。表面の「御井郡」は、筑後国御井郡をさすか。ただし全体の文意は不詳。木簡の幅に対する文字の収まり具合からみて、裏面が本来の記載であり、使用後半裁して反対面を二次利用した可能性が考えられる。7・8は人名を記す。7は、「部」の上に空白があるが、現状では墨痕は認められない。8の3文字目は、「飯」の可能性はある。10は、駿河国からのカツオの荷札。「益□郡卓陽郷」は、『和名抄』の益頭郡高楊郷にあたるか。ただし、郡名の2文字目は残画からみて「頭」にはならず、これまでに知られている「益頭」の異表記「益津」「益豆」にも該当しない。続く「美」は、コザト名の1文字目であろう。裏面の「養老三年」は719年。縦に線を2本引いて抹消している。11は、下端から約10mmの位置に、推定径5mmの穿孔がある。表裏ともに人名を記したものか。裏面3文字目は「見」の可能性はある。12は、SD2600Bからの出土。「返抄」は領収証のこと。文書木簡の断片であろう。

9は、SD3400から出土した削屑。「廿人長」は他に見

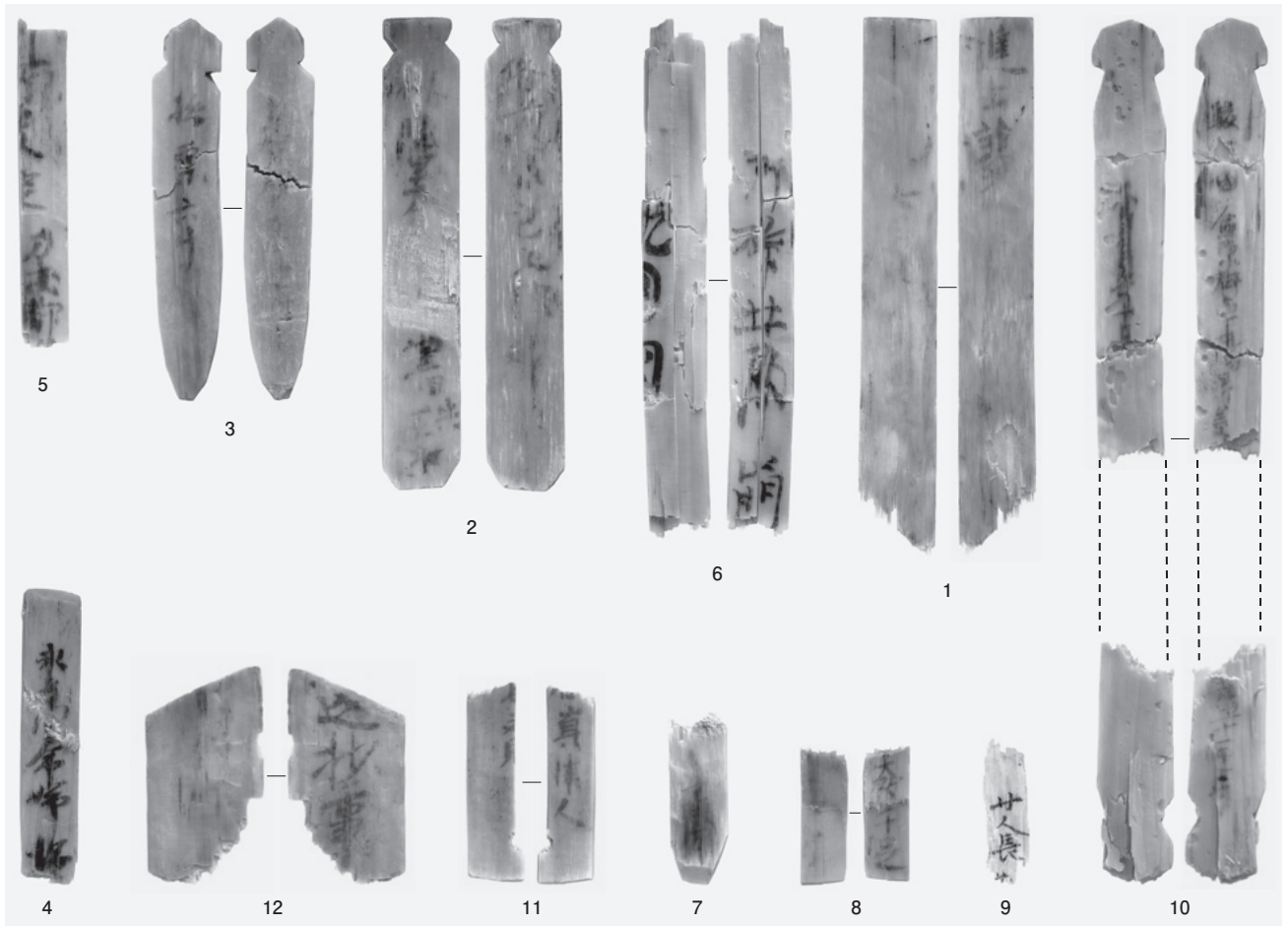


図221 第552次・第566次・第577次・第578次調査出土木簡赤外線写真

- |   |  |  |
|---|--|--|
| <p>第五七次調査<br/>朱雀大路西側溝 S D 二六〇〇</p> <p>10・駿河国益田郡 郷美 堅魚十一連一節<br/>〔卓陽カ〕<br/>〔養老三年十月〕<br/>(157+87)・17・5 031</p> <p>11・真津人。<br/>□□□。 (71)・(40)・5 081</p> <p>第五七八次調査<br/>朱雀大路西側溝 S D 二六〇〇 B</p> <p>12・返抄事<br/>□□□ (79)・46・3 081</p> | <p>第五六六次調査<br/>南北溝 S D 三四〇〇</p> <p>9 廿人長 □ 091</p> | <p>8・大□千足 □ (44)・14・3 019</p> <p>7 部 粳 万 呂 (57)・19・5 059</p> <p>6・乃御井郡 崩 (185)・(22)・4 081</p> <p>5・〔所カ〕 刀支都 □ (106)・(15)・5 081</p> <p>4 氷高命婦 □ (95)・18・4 019</p> <p>3・慈賀郡大友 □ 122・23・6 033</p> <p>2・備前国邑久郡 □ 153・24・6 032</p> <p>1・進上葛 □ 〔月カ〕 □ (176)・25・2 019</p> |
|---|--|--|

図222 第552次・第566次・第577次・第578次調査出土木簡積文



えないが、「五十長」の例から推して、20人単位の集団の責任者と考えられる。(桑田訓也)

## 8 自然科学分析

朱雀大路西側溝SD2600および二条大路南側溝SD4006、さらにSD4006に接続する南北溝SD3400の埋没にともなう堆積環境と平城京朱雀門周辺における平城京造営期以降の植生環境をあきらかにするため、地質学的、微古生物学的調査をおこなった。調査は各調査区における露頭の層相観察をおこなった上で、調査目的に合うよう試料採取地点および層位を選択した。

**試料と方法** 溝の堆積環境を検討するため、調査現場における層相観察に加え、露頭断面を切り取り、堆積構造の詳細な検討をおこなった。切り取りに際しては、スチロール製の角型ケース(縦221mm、横141mm、厚さ37mm)を用い、切り出す対象の壁面を浮き出させるようにして実施した。切取試料の採取位置と試料番号については表38にまとめ、試料採取状況については図223に取りまとめ

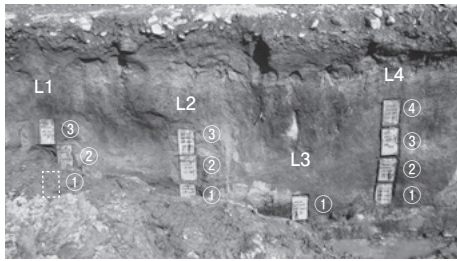
ている。試料は持ち帰った後に整形し、層相写真撮影、層相観察をおこなった。その後、フジフィルム社製軟X

表38 地質切取試料一覧

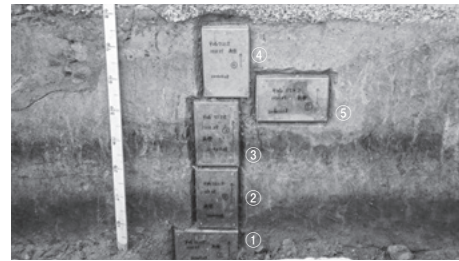
調査回数	調査区	採取位置	試料番号
第552次	北区	北壁 測線4	L4-1~4
		北壁 測線2・3	L2-1~3 L3
		北壁 測線1	L1-1~3
	南区拡張区	南壁	1~5
		西壁	1~3
		南壁 測線2	L2-1~6
第566次	西区	南壁 測線1~3	L1-8~9 L2-7、L3-10
		南北畦東壁 測線1~2	L1-1~2 L2-1~2
	東区	東西畦北壁	1~3
		南北畦西壁 測線1~2	L1-1~2 L2-1~3
		東西畦南壁	1~4
		中央畦南北断割東壁 SD2600東岸 木材周辺	1~3 1

表39 分析試料一覧

調査回数	調査区	試料番号	層位名	層番号	珪藻	花粉	植物珪酸体	年代測定
第552次	北区	北壁L4-4	床土	24		P15	PL-8	
			SD2600 灰褐色土	25上		P14	PL-7	
		北壁L4-3	SD2600 灰褐色土	25下		P13	PL-6	
	SD2600 灰色土		34上	-	P12	PL-5	-	
	北壁L4-2	SD2600 灰色土	34下		P11	PL-4		
		SD2600 灰色土	35上		P10	PL-3		
	北壁L4-1	SD2600 灰色土	35下		P9	PL-2		
		SD2600 砂層	36下	D7	P8	PL-1	-	
	北壁L1-3	灰褐色土	24	D6	P7		-	
		黒褐色土	40	D5	P6		-	
	北壁L1-2	暗灰黄色粗砂	41	-	P5		-	
		黒褐色シルト	43	D4	P4	-	AMS-2	
	北壁L3-1	オリープ灰色シルト	38	D3	P3		-	
		黒色シルト(上層)	37	D2	P2		-	
		黒色シルト(下層)	44	D1	P1		AMS-1	
第566次	東区	東西畦5	SD2600B 黄褐粘土	5	D12	P20		
		東西畦4	SD2600B 灰色粘土	8	D11	P19		
		東西畦3	SD2600B 灰色砂(ラミナ)	10/9	D10	P18	-	-
		東西畦2	SD2600B 灰色砂(ラミナ)	16	D9	P17		
		東西畦1	SD2600A 灰色砂	28	D8	P16		
第578次		SD2600A	SD2600A 灰色砂		D	P		No.1
		SD2600B	SD2600B 灰色砂				-	No.2
		SD2600A	SD2600A 灰色砂					No.3
		SD2600A	SD2600A 灰色砂最下部					No.4
							No.5	



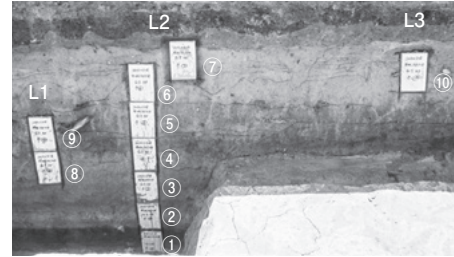
第552次調査北区 北壁試料採取層位 (南から)



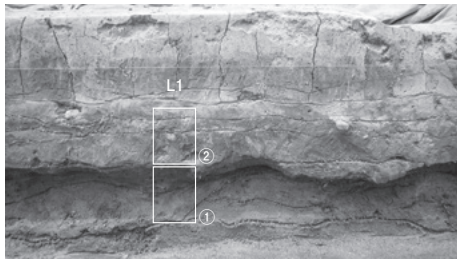
第552次調査北区 南壁試料採取層位 (北から)



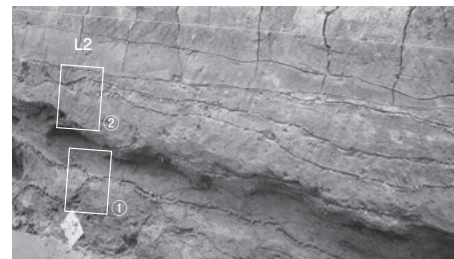
第552次調査北区 西壁試料採取層位 (東から)



第552次調査南区拡張部 南壁試料採取層位 (北から)



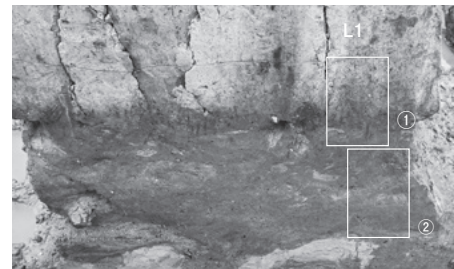
第566次調査西区 南北畦東壁試料採取層位 1 (東から)



第566次調査西区 南北畦東壁試料採取層位 2 (東から)



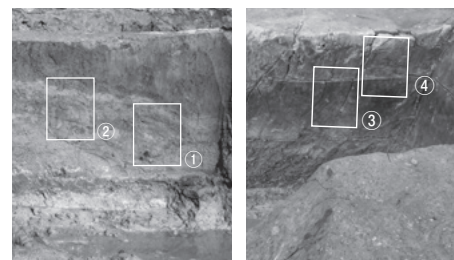
第566次調査東区 東西畦北壁試料採取層位 (北から)



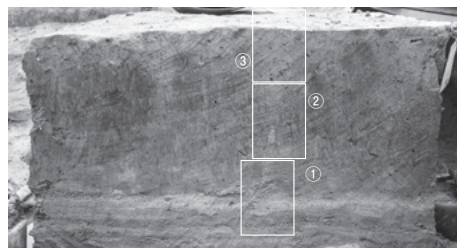
第566次調査東区 南北畦西壁試料採取層位 1 (西から)



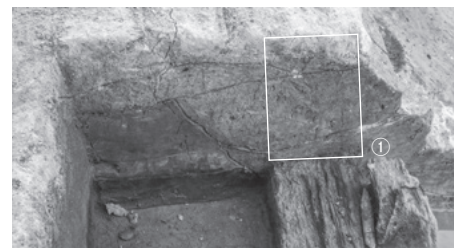
第566次調査東区 南北畦西壁試料採取層位 2 (西から)



第578次調査区 東西畦南壁 (図194・195 A-A') 試料採取層位 (南から)



第578次調査区 中央畦 (図194 C-C' 南北断削東壁) 試料採取層位 (西から)



第578次調査区 SD2600木材周辺 (図194・196 G-G') 試料採取層位 (北から)

図223 第552次・第566次・第578次調査 試料採取層位

線撮像装置とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。さらに堆積時の水域環境や植生を検討するために、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析をおこなった。また第552次調査においては、地山と目される調査区基底層、第578次ではSD2600Aに関わる年代を得るために、検出された植物遺体を用い、放射性炭素年代を測定した。分析をおこなった地点、および層位名、分析項目については表39にとりまとめた。各分析については、株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果に基づ

き過去の水域環境や植生について検討をおこなった。

**結果** 軟X線撮像による堆積構造の観察結果と各分析結果について、調査回数ごとに取りまとめる。なお、軟X線撮像データについては、層相写真(a)、軟X線撮像画像(b)、さらに同画像に堆積構造の解釈線を入れたもの(c)を掲載している(図224~235)。図の右側に記載した番号は、左から試料番号、発掘調査で与えられた土層番号示す。また土層番号の左側に土層区分線を付記した。ただし、層相観察、堆積構造観察にともなって、

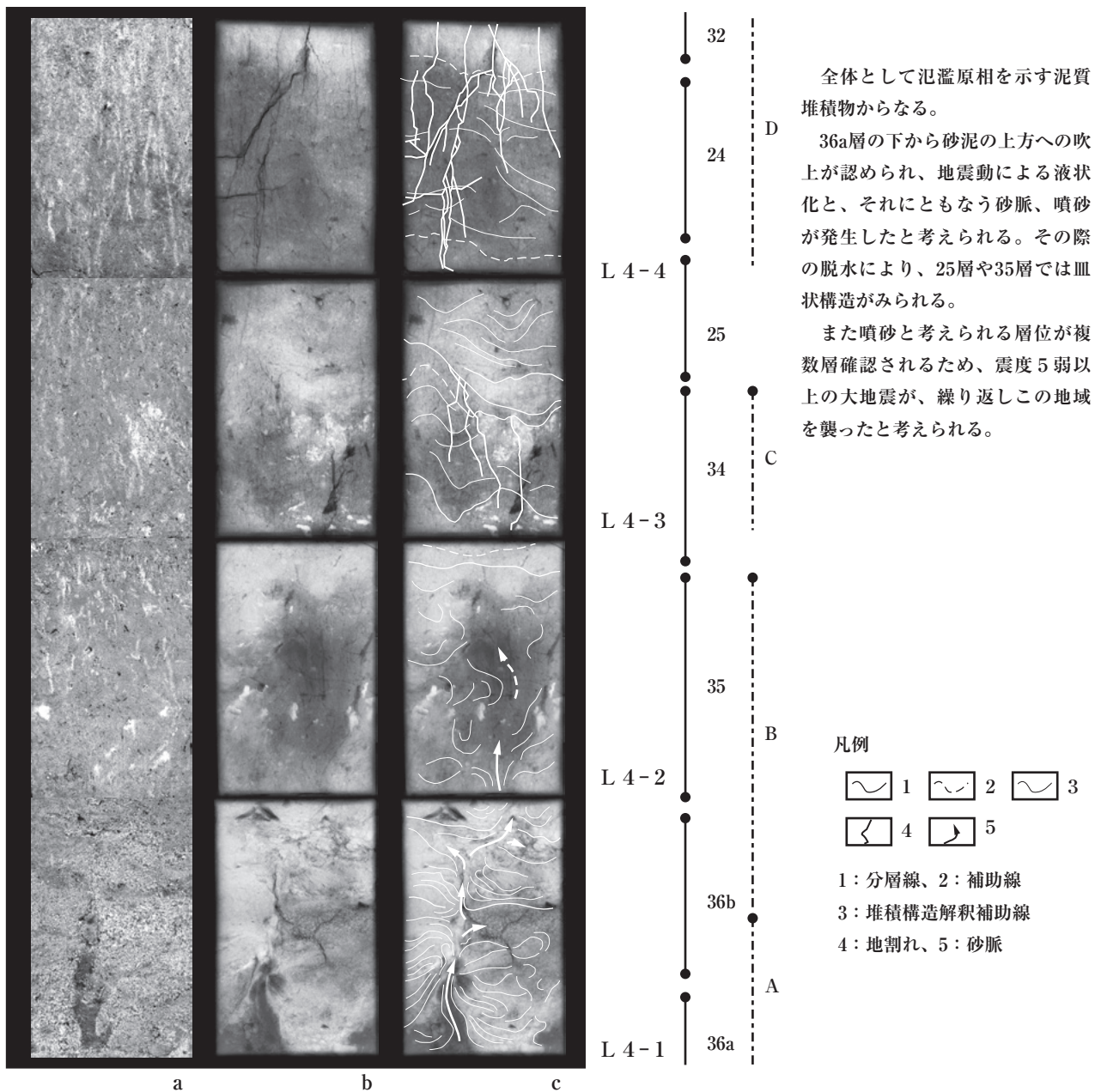


図224 第552次調査北区北壁測線4 (L4) 軟X線撮像

新たな層境界が見出された場合、土層区分線はその観察によって見出された層区分に従って表記し、土層番号は小文字のアルファベットを付記した。一方、複数の土層について層境界が見出されない場合については、土層区分線は破線とし、土層番号を付記した後、その右側に新たに土層区分線を付記し、含まれる土層番号を列記している。土層番号のさらに右側には、中点破線を表記してある図がある。これは層相観察、堆積構造観察によって

あきらかとなった地割れや液状化痕跡の鉛直方向への影響範囲である。付記したアルファベットは図ごとに独立し、必ずしも層序対比されるものではないが、同じ調査区内など層序の対比が可能である場合については、対比される現象ごとに同じアルファベットを付記している。以下に調査次数ごとの分析結果について記載する。

**第552次調査** 北区北壁の測線1～4において朱雀大路西側溝SD2600の埋没過程の基本層序について、その

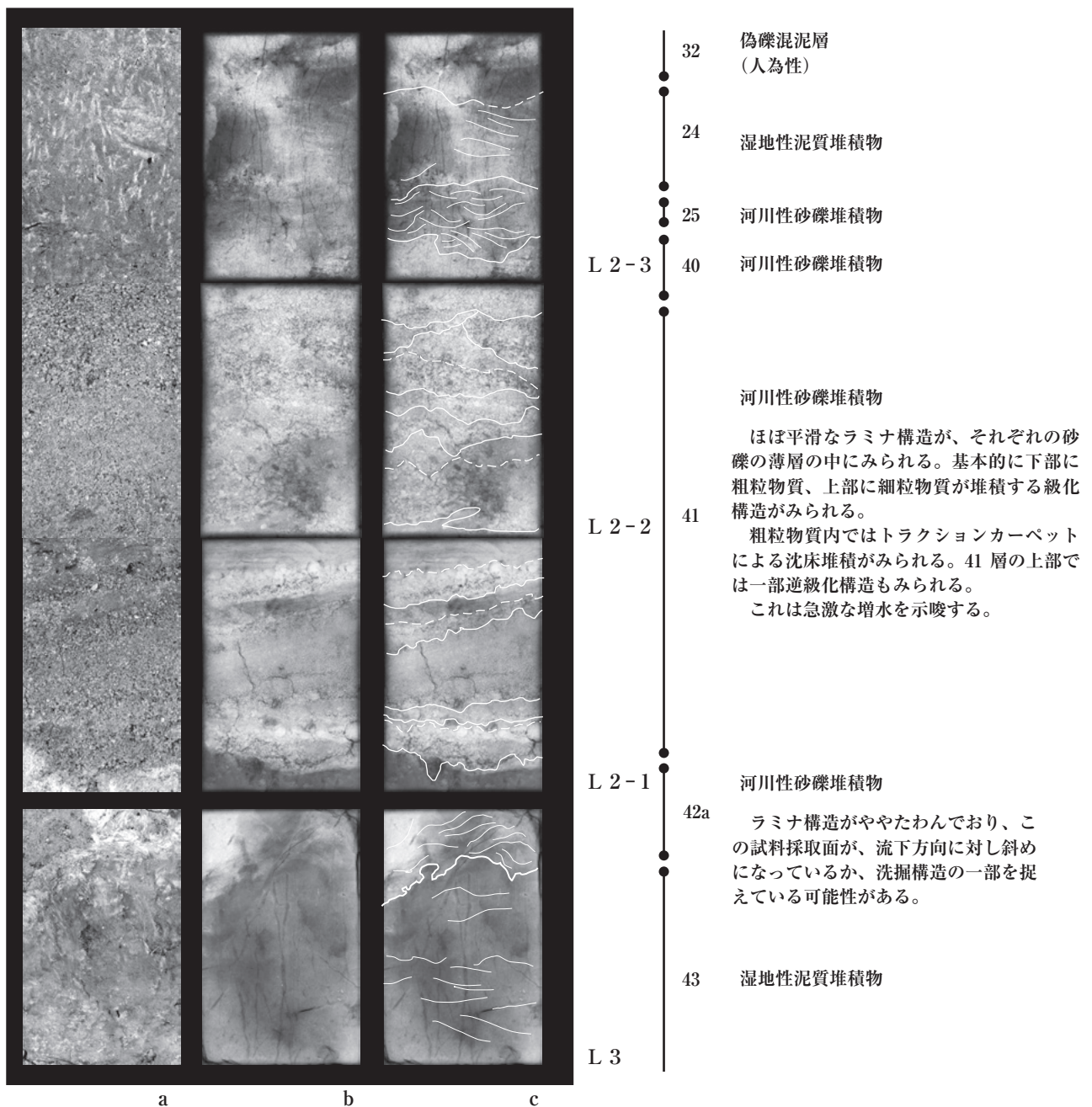


図225 第552次調査北区北壁測線2・3 (L2/L3) 軟X線撮像

地山から捉えた。この地山の堆積時期については、測線1および測線3の切取試料から得られた草本遺体に対し、放射性炭素年代測定をおこない、 $3,650 \pm 25\text{yrBP}$ . (PLD-31859) と  $3,690 \pm 25\text{yrBP}$ . (PLD-31858) の年代が得られており(表40)、平城京造営にともない掘削されたSD2600は奈良盆地に堆積する完新世の氾濫原堆積物まで及んだことがあきらかとなった。この堆積物はオリブ灰色～オリブ黒色の砂質泥層からなり、場所によってはラミナ構造をともなう特徴的な堆積物である。発掘調査において明瞭な基盤層として鍵層となろう。測線1～3(図225・226)は、主にこの地山堆積物にあたり、縄文期の氾濫原堆積相が形成されたのち、河川性堆積によるラミナ構造をともなう砂質泥が堆積している。その後、SD2600の掘削時期には高師小僧がみられるなど、氾濫原環境にあったと考えられる。珪藻化石群は、半乾燥の陸域を示す種を主体に、沼沢地や湿地に繁茂する種

が従属種となる群集が産出しており、堆積物から推定される環境と調和的である。花粉化石群(図236)は、初期的にコナラ属コナラ亜属が優占しており、コナラ亜属を主体とするような落葉広葉樹林が縄文時代後期の一時期に調査区周辺に広がっていたと考えられる。その後、コナラ属アカガシ亜属やシノキ属-マテバシ属などが優占種となることから、カシ類やシイ類などの照葉樹林が分布を広げていたと考えられる。また湿地林要素のトネリコ属や、草本花粉ではガマ属、ツリフネソウ属、ミツガシワ属、ゴキヅル属-アマチャヅル属などの好湿性植物が産出しており、調査区周辺にはやや湿った環境の存在が示唆され、他の分析結果とも調和的であった。

SD2600の埋土となる測線4(図224)では、最下部となる36層でラミナ構造をともなう河川性堆積物が確認された。その上位にあたる35層より上では、わずかにラミナ構造のみられる層位があるものの、全体的に構造の不

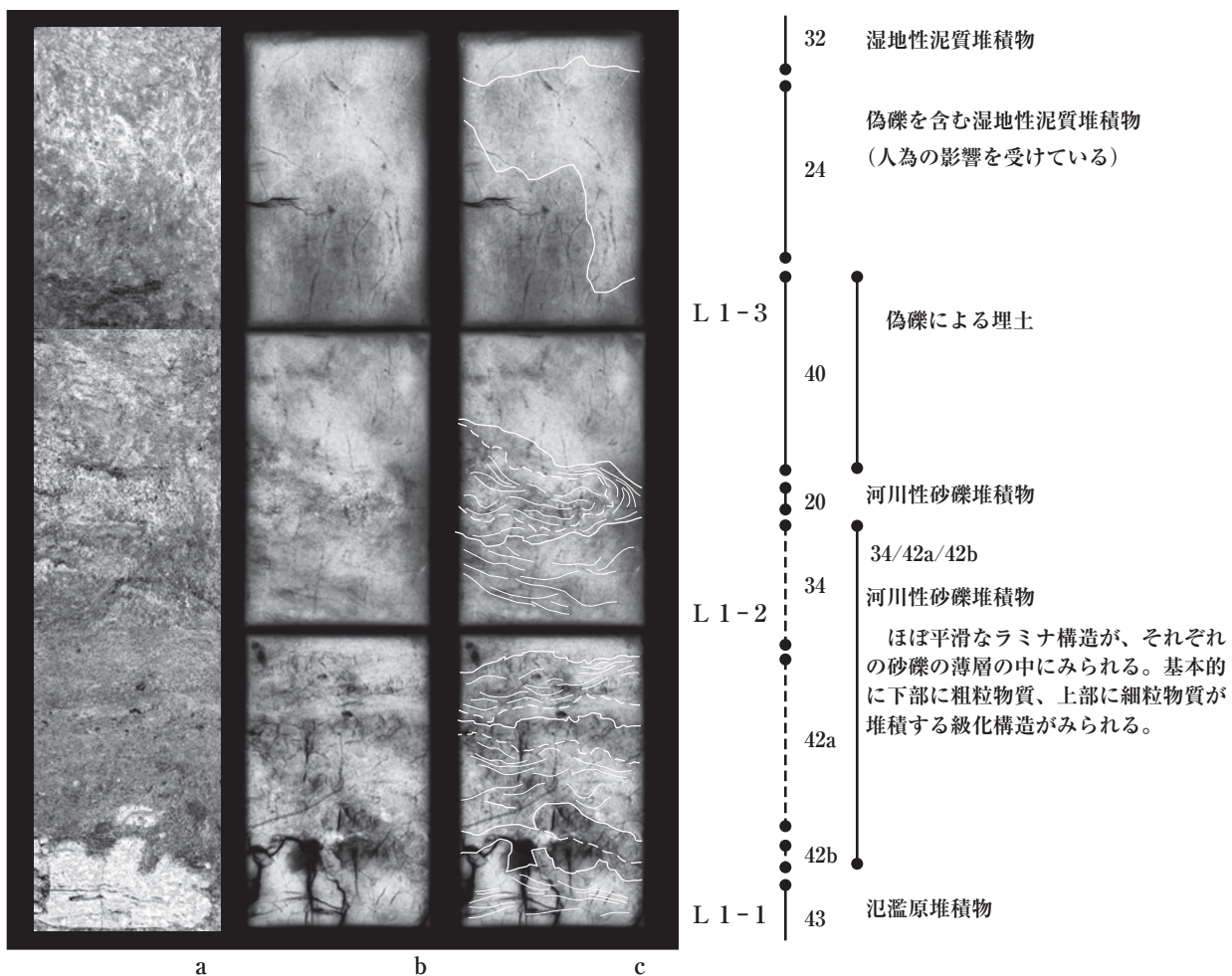
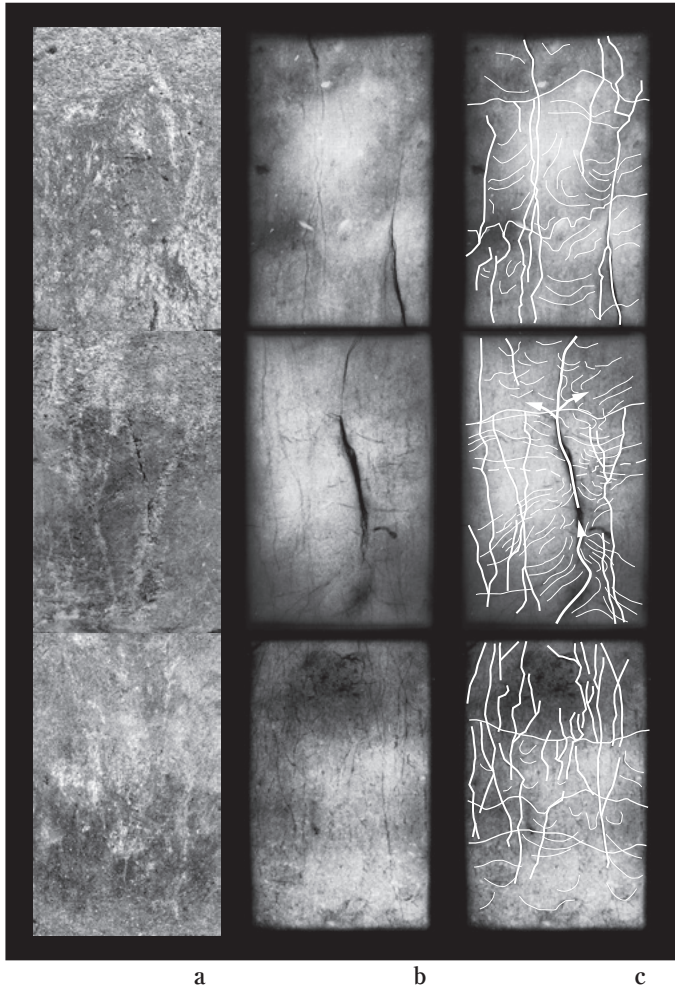
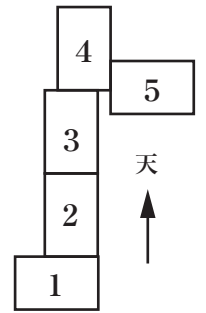
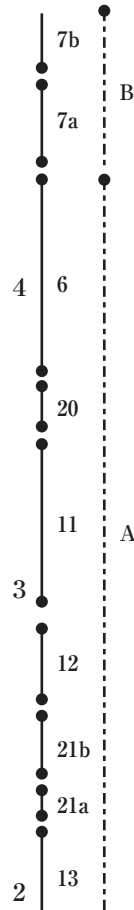


図226 第552次調査北区北壁測線1(L1)軟X線撮像



a b c

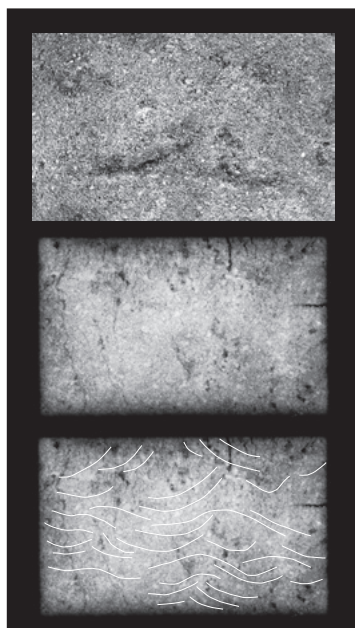


試料採取層位位置

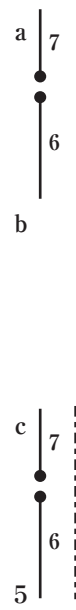
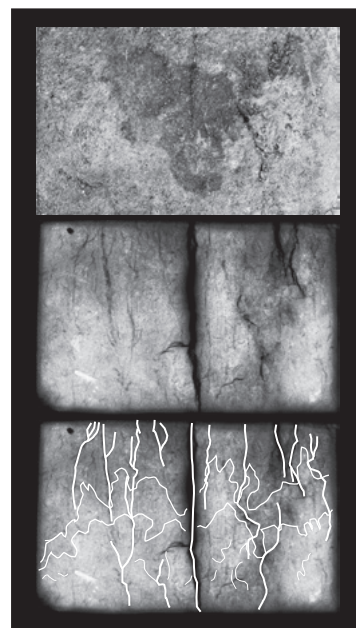
河川性砂泥堆積物

ほぼ平滑なラミナ構造が、各層にみられるが、地震動に起因するとみられる液状化により7層、6層、21層では脱水ともなう皿状構造や羽状構造がみられる。

また噴砂と考えられる層位が2層確認されるため、震度5弱以上の大地震が、少なくとも2度、この地域を襲ったと考えられる。



河川性砂礫堆積物  
上部と下部ではクロスラミナ、中部ではややトラフ型のラミナが発達する。



氾濫原泥質堆積物  
地割れと火炎構造がみられる。

図227 第552次調査北区南壁軟X線撮像

明瞭な偽礫を含む泥層が堆積し、沼沢地のような滞水環境が形成されていたと考えられる。珪藻化石群は、最下部で河川性種がやや優占して出現したのち、陸域、沼沢地を指標する種群が主体種となる。さらにその産出量は、一般的な水成堆積物に比べ10分の1以下と極めて少産であり、珪藻の生産を支持するだけの水域が形成されていなかったことをうかがわせる。この種群と堆積構造から推定される結果は、最初に流れのある水路として機能していたSD2600は、35層堆積以降、富栄養化の進む濁った沼沢地環境に変遷したと考えられる。花粉化石(図236)は、マツ属複維管束亜属やスギ属の産出が多くなる。このため、コナラ属コナラ亜属やコナラ属アカガシ亜属、シイノキ属-マテバシイ属とともに、ニヨウマツ類やスギを主体とする森林が8世紀半ば~後半における平城京周辺に分布したと考えられる。草本花粉でイネ科が多く産出しており、サジオモダカ属やオモダカ属、イボ

クサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの水田雑草を含む分類群と共伴している点を考慮すると、調査区周辺において水田稲作がおこなわれていた可能性が考えられる。さらにソバ属やベニバナ属の花粉も産出しており、稲作の他にもソバ栽培やベニバナ栽培がおこなわれていた可能性が推定された。加えてこの時期はウコギ科が微増している。ウコギ科やマツ属複維管束亜属は陽樹に含まれる分類群である。このため、8世紀半ば~後半における調査区周辺は、稲作やソバ・ベニバナ栽培がおこなわれるなど、人間活動の活発な開けた場所が広がり、ウコギ科やマツ属複維管束亜属が分布を広げやすい環境であったと思われる。

また調査現場で観察された36層上面のたわみは、35層からの踏み込みによる加重痕跡の可能性が想定されたが、軟X線撮像による観察から、液状化による脱水構造と噴砂による構造であることがあきらかとなった。測線

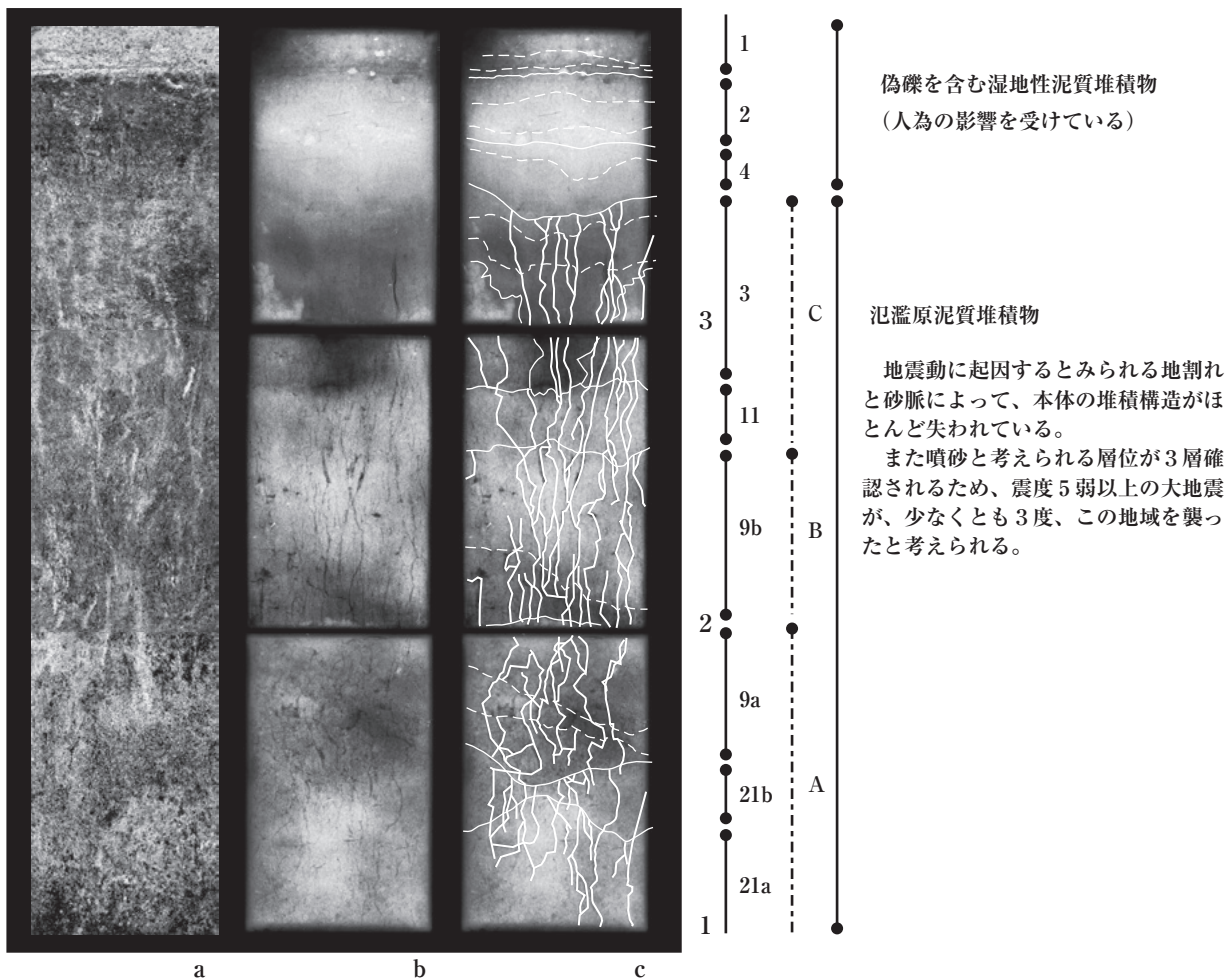


図228 第552次調査北区西壁軟X線撮像

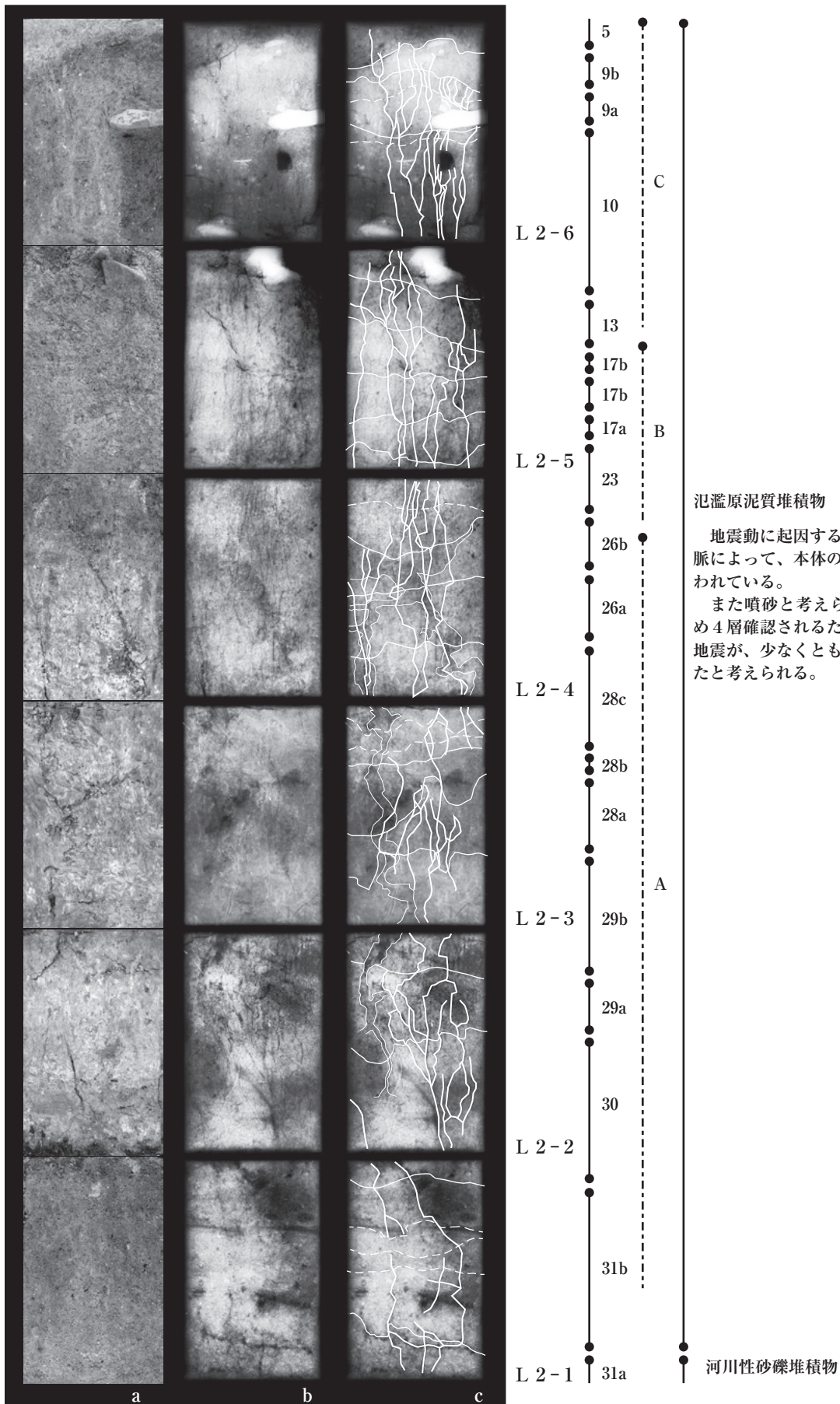


図229 第552次調査南区拡張区南壁測線2 (L2) 軟X線撮像



4では36層、35層でこの構造が顕著であり、その上位となる34層から32層にかけては、細かな亀裂が鉛直方向に多数観察される。高師小僧などの植物根の痕跡や、昆虫類の巣穴などの生物痕跡と異なり、多くの亀裂では、層の上位、特に一時期の地表となったと目される不整合面や硬化面にむかって枝数が増えており、鉄分や硫黄分の壁面吸着による析出痕がみられない。このような亀裂群は、下部で液状化痕跡と繋がるものが多く、結果的に地

震動によって形成された一連の地割れであると考えられる。また地割れを層上位に辿ると、下部の液状化痕と認識された地割れの充填堆積物と同様の堆積物が堆積する層位が複数認められた。今後、粒度組成分析や鉍物組成分析の結果が待たれるが、これらの堆積物は地震動により発生した液状化にとまなう噴砂である可能性がある。この層位に注目すると、測線4では少なくとも4層位(A~D)が確認された。一般的に噴砂は震度5弱の大地震

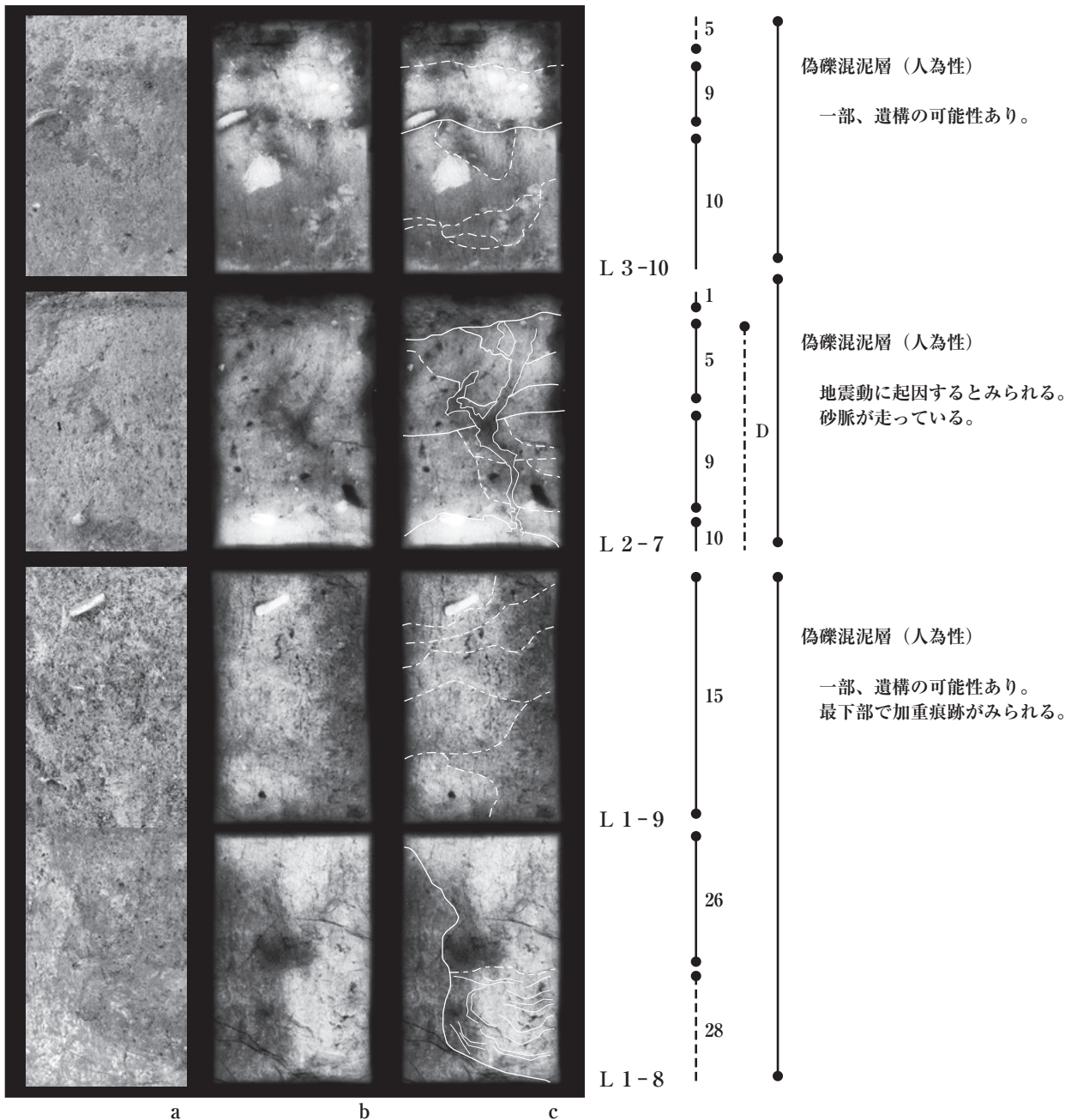


図230 第552次調査南区拡張区南壁測線1~3 (L1/L2/L3) 軟X線撮像

に区分される地震動により発生しやすいとされ、複数の大地震が平城京造営後にこの地を襲い、朱雀門周辺が液状化した可能性を示唆する。このような液状化の痕跡は、北区南壁（図227）、北区西壁（図228）、南区拡張区南壁（図229・230）でも確認された。特に北区北壁測線4（図224）と南区拡張区南壁測線2では、4つの層位において、噴砂と推定される堆積物が確認されており、4度の大地震に見舞われた可能性がある。今後、噴砂としての認定、発生時期の検証を進めていきたい。

**第566次調査** 西区では、SD4006と調査区中央付近で北側から合流するSD3400の埋没過程を検討した（図231）。切取試料の層相を観察すると、全体として大きくうねりのあるラミナ構造や、一部、踏み込みの痕跡とみられる加重痕がみられる。測線2は最下部となる18a層で基盤のシルト層の剥落塊（マッドクラスト）を巻き込むように砂層が堆積し、上位の18b層に向かって粒径の淘汰が良くなり、それとともにクロスラミナが形成されている。測線1における18層は、この18a層に構造か

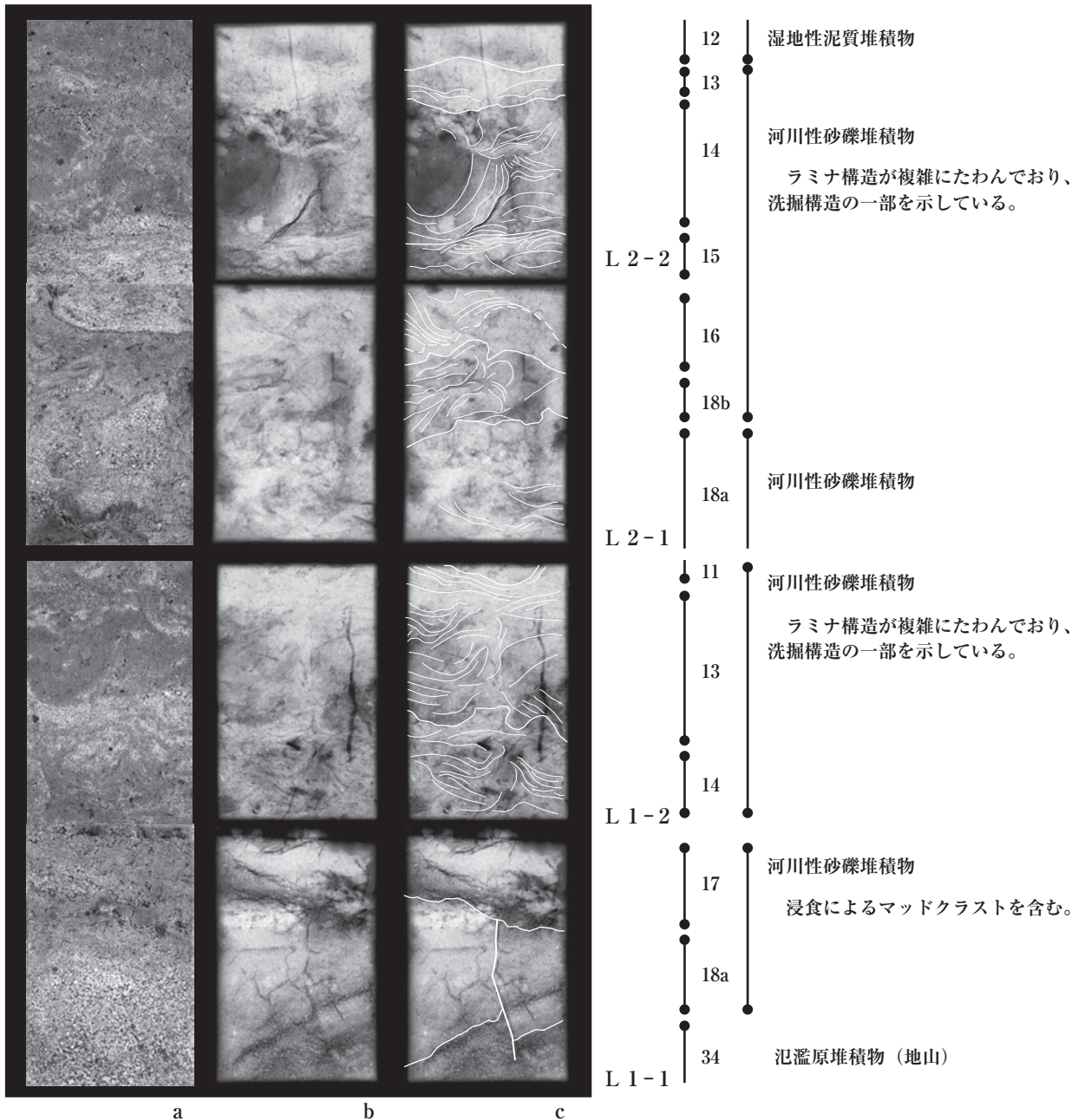


図231 第566次調査西区南北畦東壁測線1・2 (L1/L2) 軟X線撮像

ら対比される。16層はうねるようなラミナ構造が形成されており、流路の曲がり角に見られる洗掘構造ともなう堆積と推定される。その上位となる15層では、やや層厚が厚いがクロスラミナが形成されており、この地点において一方向への流れに変わったことが示唆される。14層は15層に引き続く堆積と考えられるが、試料左側に大きな踏み込み痕跡や木片などの植物遺体の集積が観察され、水域に人間の活動がおよんだことがわかるとともに、水域が比較的浅かったことが推定される。13層の上位から12層にかけて、偽礫の混入量が増えると主に、堆積構造が不明瞭となる。排土や盛土といった人間活動がこの堆積を促したと推定される。測線1の下部18a層から34層にかけ、原因は不明だが小断層がみられた。17層は葉片や木片を主体とした植物遺体の流れ込みによる集積がラミナ構造を形成しており、比較的穏やかな水流があったと考えられる。14層の上面はたわんでおり、その上位

の13層に加重痕がみられることから、少なくとも13層からの踏み込みが発生したと考えられる。11層から14層まではラミナ構造がみられるため、継続的な流水環境下によって堆積が進んだものと理解されるが、加重痕により初現の堆積構造に変形が加えられているため、流水環境の詳細は不明である。今後、珪藻分析、粒度組成分析等を加え、流水環境の詳細について検討を加えたい。

東区では二条大路南側溝SD4006とSD2600の合流する地点の様相と、合流部より北側にみられた1段浅いSD2600の堆積について検討をおこなった。合流部北側の東西畦北壁では、流水堆積相が陸域堆積相に変遷する様相が観察された(図232)。流水堆積は、地山と目される最下部の灰色粗砂相とd層堆積時から継続していると考えられる。平城京造営期以降とされる29層は、d層を浸食する中粒砂を主体とする河川性砂礫である。本層から8b層まではラミナ構造が形成されており、流水環境

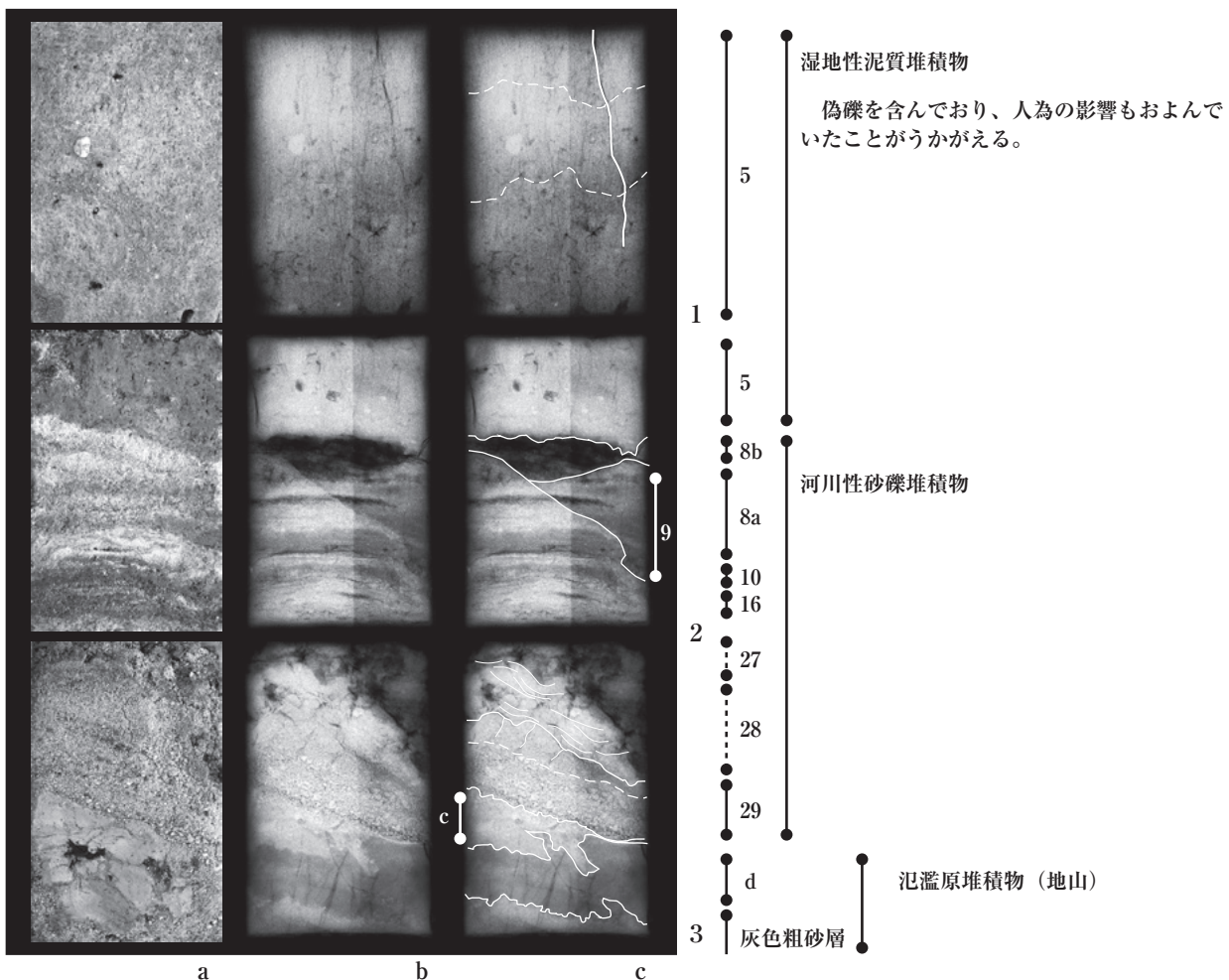


図232 第566次調査東区東西畦北壁軟X線撮像

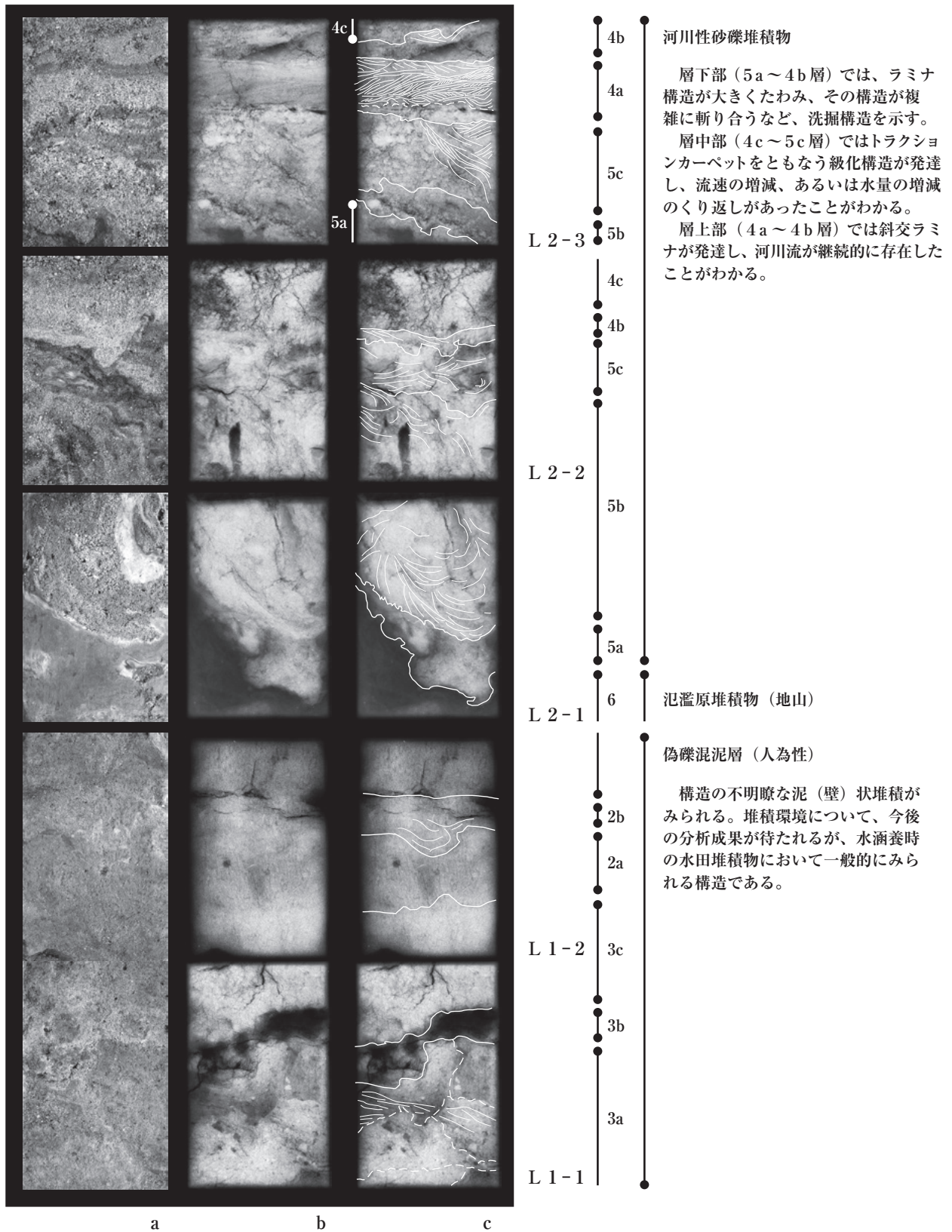


図233 第566次調査東区南北畦西壁軟X線撮像

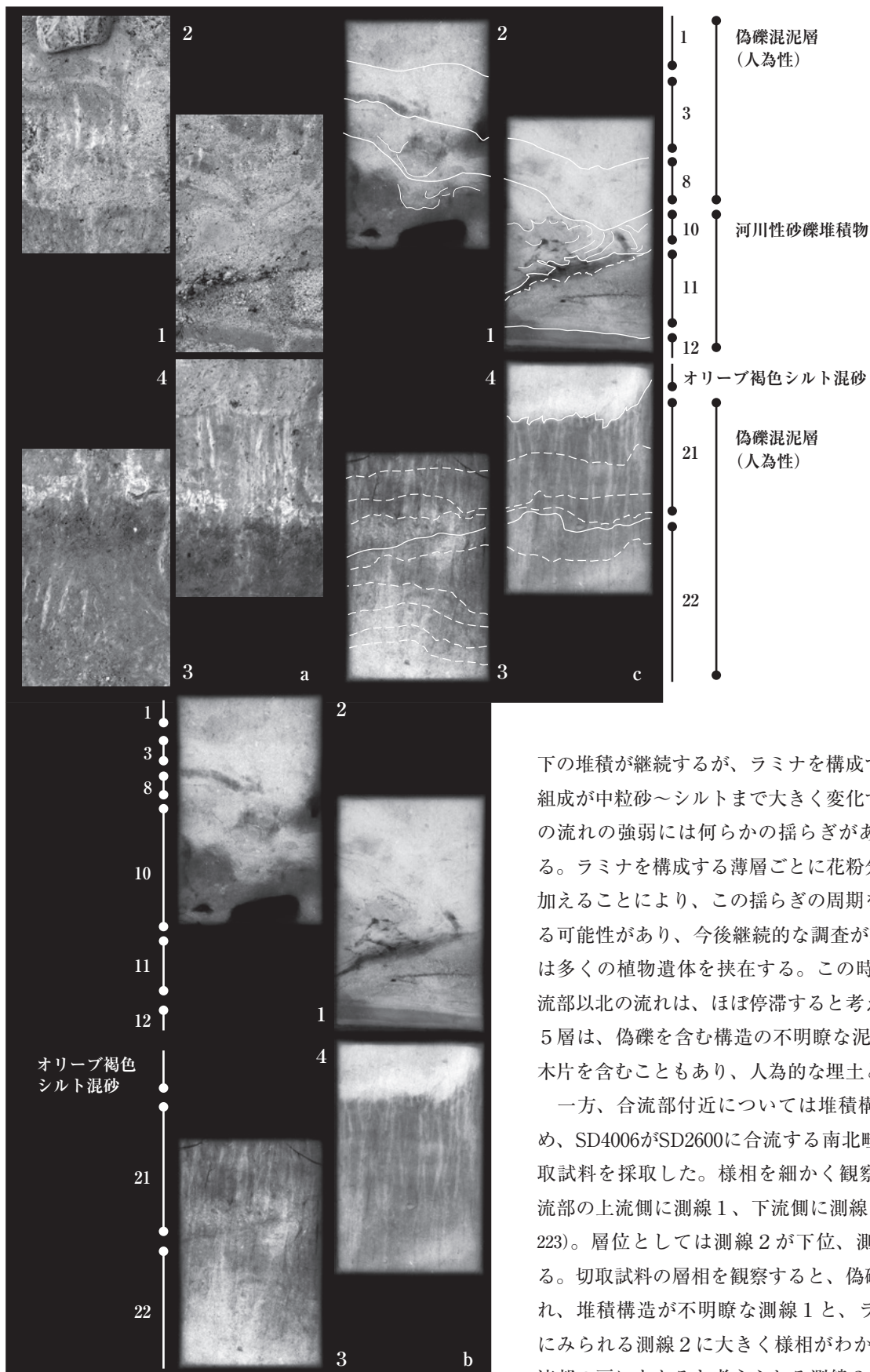


図234 第578次調査東西畦南壁 (図194・195 A-A') 軟X線撮像

下の堆積が継続するが、ラミナを構成する堆積物の粒径組成が中粒砂～シルトまで大きく変化することから、水の流れの強弱には何らかの揺らぎがあったと考えられる。ラミナを構成する薄層ごとに花粉分析や珪藻分析を加えることにより、この揺らぎの周期をあきらかにできる可能性があり、今後継続的な調査が望まれる。8 b層は多くの植物遺体を挟在する。この時点でSD2600の合流部以北の流れは、ほぼ停滞すると考えられる。上位の5層は、偽礫を含む構造の不明瞭な泥質堆積物である。木片を含むこともあり、人為的な埋土と推定される。

一方、合流部付近については堆積構造を検討するため、SD4006がSD2600に合流する南北畦西壁において切取試料を採取した。様相を細かく観察するために、交流部の上流側に測線1、下流側に測線2を設定した(図223)。層位としては測線2が下位、測線1が上位となる。切取試料の層相を観察すると、偽礫や加重痕がみられ、堆積構造が不明瞭な測線1と、ラミナ構造が明瞭にみられる測線2に大きく様相がわかる(図233)。合流部の肩にあたると考えられる測線2の堆積は、3 a～3 c層にかけて偽礫の堆積がみられ、盛土である可能性

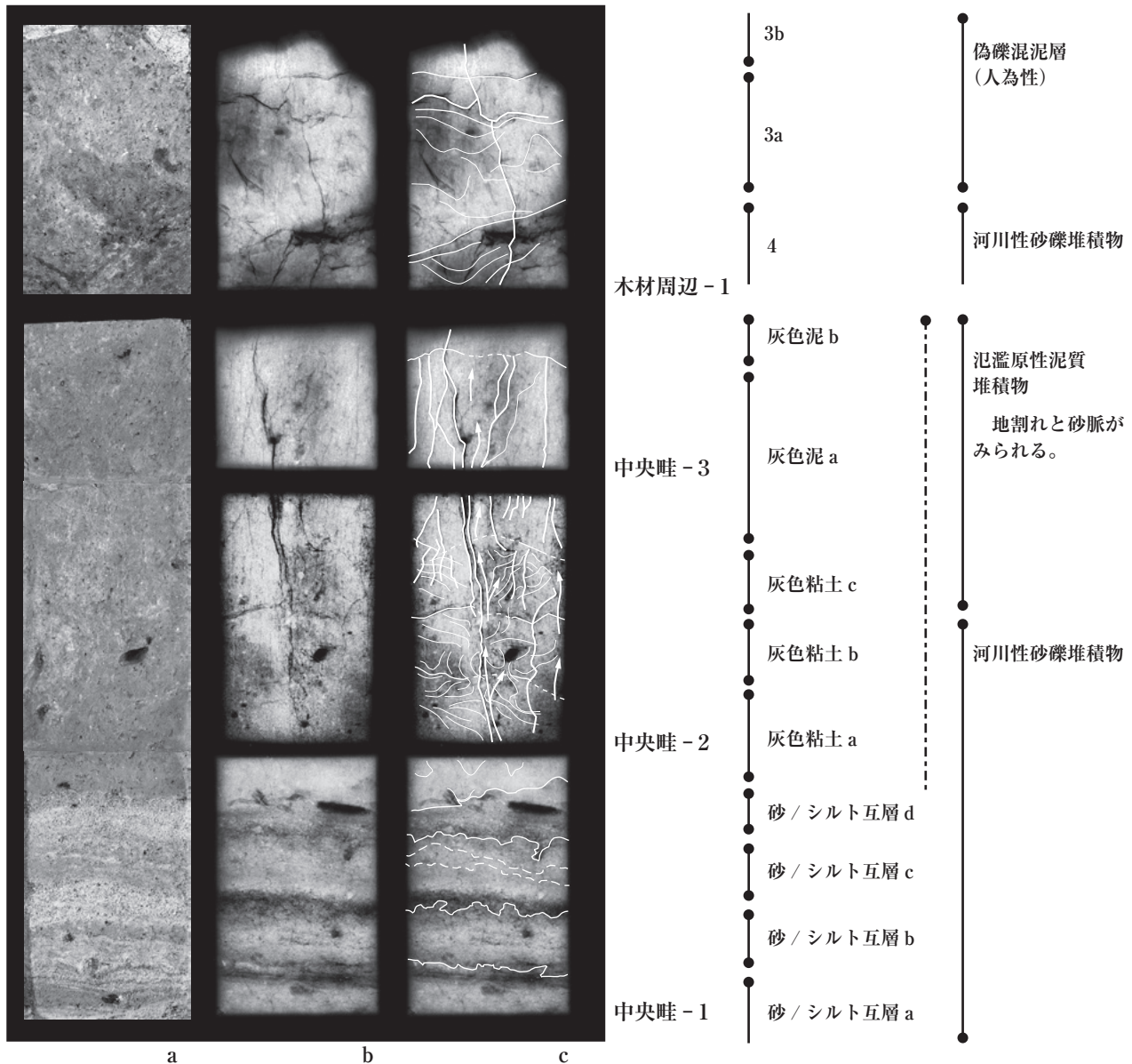


図235 第578次調査中央畦およびSD2600東岸木材周辺軟X線撮像

が高い。2層より上位では踏み込み痕と考えられる加重痕跡がみられるほかは、無構造な泥状堆積物である。今後、さらに詳細な分析が必要とされるが、このような無構造の泥状堆積物は、しばしば水涵養時の水田堆積物の一部として観察される。測線2は、地山と考えられる6層上面を浸食する5a層から5c層まで流水による堆積が進む。特に5b層は水流の回転を示唆する洗掘構造がみられ、SD4006とSD2600の直交合流による曲流の発生を示している。当然のことながら、SD4006からの流れ込みが強ければ、SD2600の東岸は大きく浸食されることになり、調査現場における遺構図と合致する。4層は、

層相観察から河川性砂礫による埋積が予想されたが、軟X線撮像からの観察では人為を示唆する大型の偽礫が多量に入り込んでおり、人の手による埋積である可能性がある。L2-1、2の下流側となるL2-3からは洗掘構造はみられなかった。5b層から5c層下部は粗粒～中粒砂を主体とする河川性砂礫が堆積することから、比較的流速の早い水流が存在したことを示唆するが、5c層上部では一転して細粒砂を主体としたクロスラミナを形成する河川性砂礫が堆積し、水の流れが急激に穏やかになったことを示している。これは流速が遅くなった場合と、流量自体が減少した場合の両方が考えられる。4a

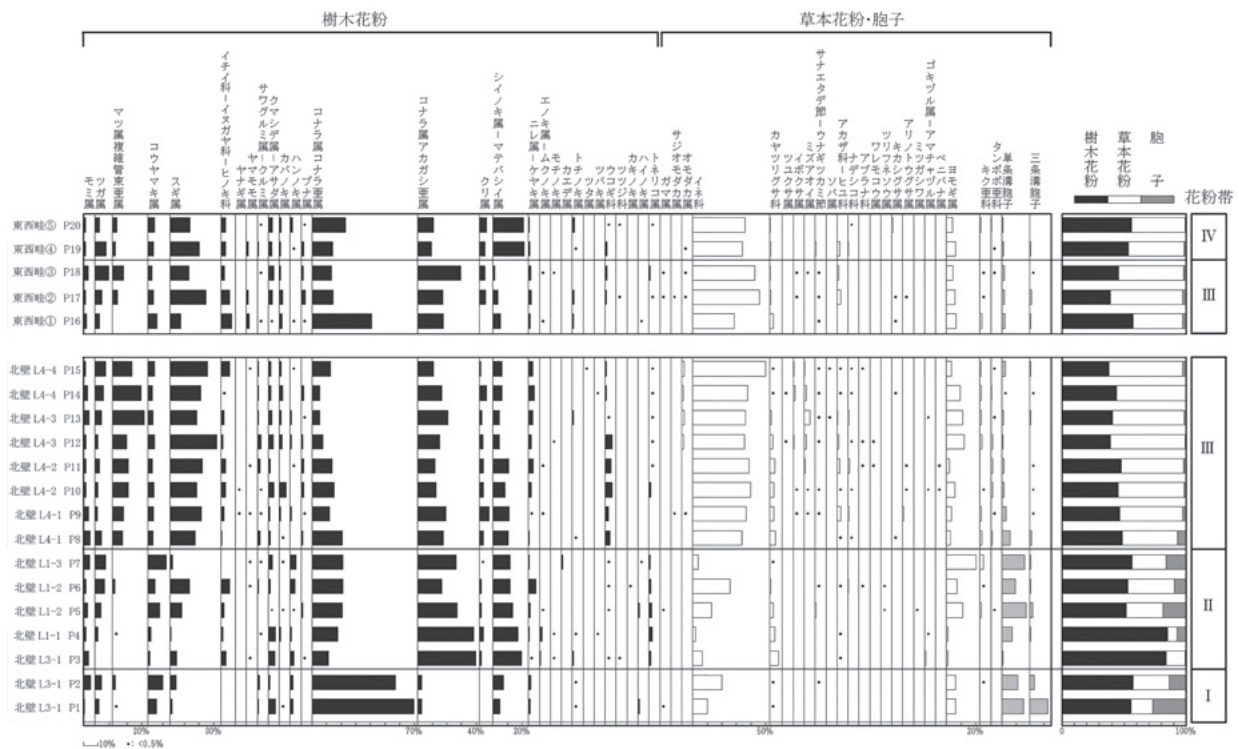


図236 第552次調査北区北壁および第566次調査東区東西畦北壁から産出した花粉化石のダイアグラム  
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は産出花粉孢子総数を基数として百分率で算出した)

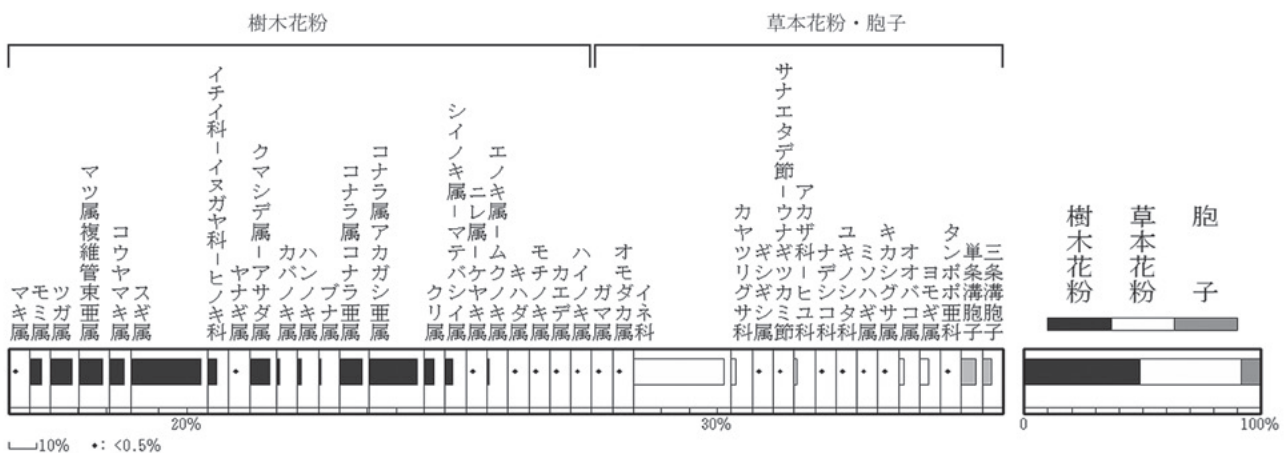


図237 第578次調査SD2600埋土から産出した花粉化石のダイアグラム  
 (樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は産出花粉孢子総数を基数として百分率で算出した)

層は細かなクロスミナができており、穏やかな水流が継続的に流れていたことを示す。一方、4b層から4c層では偽礫を含む堆積が進んでおり、人間活動の波及による埋没が示唆される。

**第578次調査** 朱雀大路西側溝SD2600A、SD2600Bの関係などを検討するために、調査区東西畦南壁(図194・195 A-A')と中央畦(図194 C-C')南北断割東壁およびSD2600東岸木材周辺(図194・198 G-G')の堆積物を切り取った。さらに、杭列の打設時期や溝の埋没開始期の年代を検討するため、出土したモモ核や木材片について

放射性炭素年代測定をおこなった(表40)。また、溝の埋積環境を検討するため、SD2600B底部の灰色砂層について、花粉分析、珪藻分析を加えた。北壁における切取試料は、東岸、西岸付近で採取し、SD2600の肩となる地山面より試料3、4、SD2600Bの埋土より試料1、2を採取した(図223・234・235)。地山面と考えられる22層、21層は、高師小僧が密に観察されるが、多くの偽礫を挟在しており、人為性の強い堆積土に植生が侵入し、湿原堆積相に変遷したことを示す。その上位に当たるオリブ褐色シルト混砂層は、21層上面を浸食してお

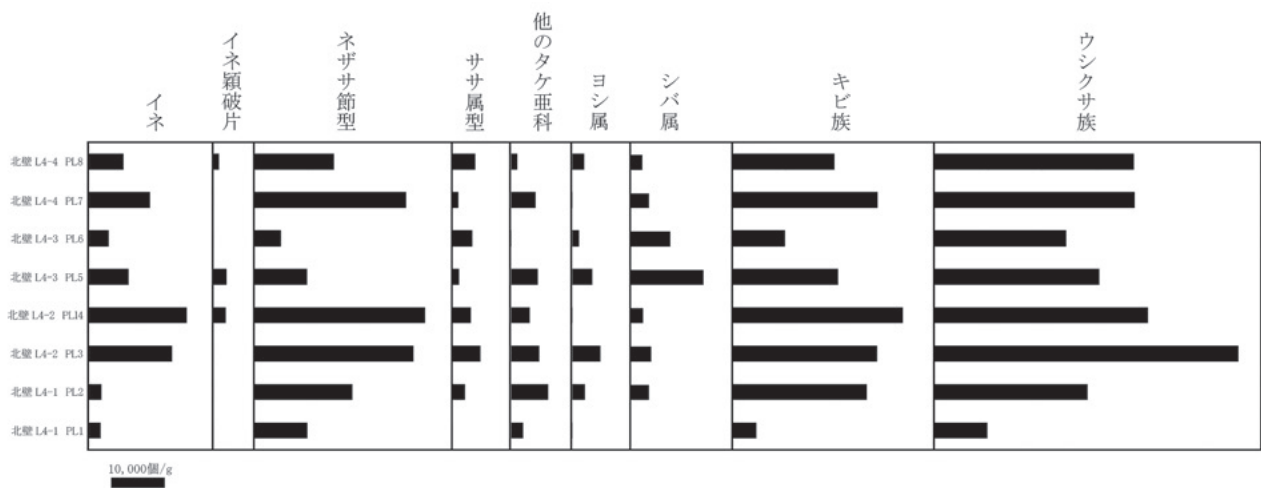


図238 第552次調査北区北壁から産出した植物珪酸体のダイアグラム

表40 放射性炭素年代測定と暦年較正の結果

測定番号	調査回数 調査区	層位	試料	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
							1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-31858 (AMS1)	第552次 北区北壁	黒色シルト	草本 (生)	-27.84 $\pm$ 0.31	3,690 $\pm$ 23	3,690 $\pm$ 25	2,133-2,082 cal BC (45.3%)	2,190-2,181 cal BC (1.2%)
							2,060-2,034 cal BC (22.9%)	2,143-2,018 cal BC (91.9%) 1,995-1,982 cal BC (2.3%)
PLD-31859 (AMS2)	第552次 北区北壁	黒褐色粗砂	草本 (炭化)	-27.23 $\pm$ 0.30	3,651 $\pm$ 23	3,650 $\pm$ 25	2,116-2,099 cal BC (11.6%) 2,039-1,973 cal BC (56.6%)	2,132-2,086 cal BC (21.9%) 2,051-1,946 cal BC (73.5%)
PLD-33906 (No.①)	第578次	SD2600A 灰色砂層	モモ核	-25.11 $\pm$ 0.27	1,337 $\pm$ 18	1,335 $\pm$ 20	658-677 cal AD (68.2%)	650-691 cal AD (93.0%) 751-761 cal AD (2.4%)
PLD-33907 (No.②)	第578次	SD2600A 灰色砂層	モモ核	-26.06 $\pm$ 0.28	1,466 $\pm$ 19	1,465 $\pm$ 20	575-620 cal AD (68.2%)	563-641 cal AD (95.4%)
PLD-33908 (No.③)	第578次	SD2600B 灰色砂層	モモ核	-27.71 $\pm$ 0.37	1,304 $\pm$ 21	1,305 $\pm$ 20	666-710 cal AD (48.4%) 746-764 cal AD (19.8%)	661-722 cal AD (66.5%) 741-768 cal AD (28.9%)
PLD-33909 (No.④) 遺物:9937	第578次	SD2600A 灰色砂層	生材 (非最外年輪)	-27.70 $\pm$ 0.34	1,384 $\pm$ 21	1,385 $\pm$ 20	644-661 cal AD (68.2%)	617-670 cal AD (95.4%)
PLD-33910 (No.⑤) 遺物:9938	第578次	SD2600A 灰色砂層	生材 (非最外年輪)	-28.48 $\pm$ 0.27	1,360 $\pm$ 20	1,360 $\pm$ 20	651-668 cal AD (68.2%)	644-680 cal AD (95.4%)

り、堆積構造は不明瞭であるが、初期的には21層を掘り込む流れが存在したことを示唆する。SD2600Bの灰色砂層から産出した珪藻化石は、湿地や陸域を指標する種から構成されており、堆積構造と調和的であった。また花粉分析(図237)では、樹木花粉としてスギ属の産出が目立ち、遺跡周辺の丘陵地などにはスギ林が分布していたと考えられた。またモミ属やツガ属の産出もみられ、丘陵地にはモミやツガからなる中間温帯林も成立していた可能性がある。スギ属に次いで多く産出するのがコナラ属アカガシ亜属であり、シイノキ属-マテバシイ属をともなっている。結果、調査区周辺にはカシ類やシイ類からなる照葉樹林も分布していたと考えられる。さらに、マツ属複雑管束亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属は二次林要素の植物を含む分類群としても知られ、遺跡周辺の開けた明るい場所にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどからなる二次林も分布していたと考えられる。草本花

粉ではイネ科の産出が目立ち、SD2600の周辺にはイネ科が分布を広げていた可能性がある。また、抽水植物のガマ属やオモダカ属、キカシグサ属、好湿性のミソハギ属などの産出もみられ、イネ科の多産とあわせて考えると、SD2600の周辺には水田が存在していた可能性もある。年代測定の結果は、SD2600A底部から出土した種実2点は、7世紀中頃~8世紀中頃の年代を示し、飛鳥時代~奈良時代に相当する。SD2600Aが平城京造営期初期に掘削されていたと考えれば調和的な年代である。一方、SD2600A灰色砂層最下層から出土した生材2点は、7世紀前半~後半の年代を示し(表40)、想定された年代よりもやや古い飛鳥時代に相当する。ただし計測した試料は、最終形成年輪よりも内側の年輪と考えられるため、枯死・伐採年よりも古い年代を示している可能性がある。木材周辺の堆積構造は、偽礫の集積から形成されており、人の手による埋土であることがあきらかと



なった(図235)。また中央畦の切取試料では、全体として水流を示すラミナが発達し、灰色粘土層より上では偽礫の混入がみられることから、人為的な埋積と考えられる。また、砂/シルト互層dから地割れと噴砂が延びており、地震の痕跡が認められた。引き続き地震発生期の検討をおこないたい。(村田泰輔)

## 9 まとめ

### 朱雀門前における朱雀大路の規模が判明

右京三条一坊一・二坪において、朱雀大路西側溝SD2600を第578次調査区・第566次調査区では約37m分、第552次調査北区、南区でそれぞれ約20m分、第577次調査区では約6m分検出した。朱雀大路の規模は、今回の調査成果と既往の左京三条一坊一・二坪における朱雀大路東側溝の調査成果とを合わせると、東西両側溝の心心間で、それぞれ約74.5m(第566次調査東区・第180調査区間)、73.3~73.6m(第552次調査南区・奈良市第321次調査区間)、73.6~73.7m(第552次調査北区・奈良市第342次調査区間)となる<sup>5)</sup>。

### 右京における朱雀門前の排水計画

**条坊側溝の規模** 朱雀大路西側溝SD2600のほか、二条大路南側溝SD4006、西一坊坊間東小路西側溝SD2641、三条条間北小路北側溝SD3372、南側溝SD3373を検出した。既往調査で、SD2600は、二条大路を横断することが想定されていた(第143次調査)が、今回の調査であらためて確認した。それぞれの規模は、SD2600は幅3.0~7.0m、深さ最大約1.1m、SD4006は幅3.5~4.5m、深さは最大約1.2m、SD2641は幅約1.6m、深さ0.5m、SD3372は幅1.8~3.5m、深さ約0.3m、SD3373は幅0.9~1.8m、深さ約0.2mである。

**南北溝SD3400の検出** 二条大路を横断する南北溝SD3400を新たに検出した。この南北溝SD3400は二条大路南側溝SD4006と同時に機能し、そして廃絶されている。その性格については今後も検討していく必要があるが、南面大垣周辺または宮内からSD4006への排水機能を有していた可能性がある。

### 朱雀大路西側溝の構造と架橋の存在を確認

**橋遺構の検出** 右京三条一坊一坪の坪内道路と朱雀大路を結ぶ橋SX3355は、東西2間(約3.8m)、南北2間(約3.3m)の規模をもつ。左京側の対称位置では2時期にわ

たる橋SX1016、SX1017が検出され、前者の規模は、東西1間(3m)、南北3間(4.8m)、後者は南北8間(4m)、東西1間(1.5m)である。前者は柱掘方をとまない、後者はSX3355の橋脚と同じ杭の打ち込みによる<sup>6)</sup>。これらの規模と構造は、SX3355とは異なる。

**しがらみ護岸と杭列** 朱雀大路西側溝SD2600では、調査区全域にわたって護岸用と考えられる杭列を確認した。また、これらの杭列の一部には細枝を編みこんだしがらみを検出した(SX3410・3443)。しがらみ護岸SX3443は、裏込めに木材を用いる点で他所とは異なる構築手法が想定できる。杭列SX3357やSX3369、SX3370、SX3421、SX3422は本来しがらみを有していた可能性はあるものの残存しない。これらの杭間の間隔や打ち込み位置などもそれぞれ異なる。

**張出遺構の検出** 朱雀大路西側溝SD2600が二条大路を横断する部分で張出遺構を3基検出した。それらは、二条大路の中軸とその南北両側約9mにほぼ等間隔に配置されている。規模は東西最大約1.6m、南北最大約4.1mで、地山を削り出し、積土によって構築されている。これらの張出遺構の周辺には、橋に関連する遺構は認められない。橋脚も検出されず性格は判然としないものの、配置の計画性から、朱雀大路西側溝に架かる橋の基礎の可能性はある。ただし、橋以外にも水流調整など異なった機能を有していた可能性も検討すべきであろう。

### 右京三条一坊の空間利用と遮蔽施設

**一坪の空間利用** 今回の調査によって右京三条一坊一坪は、少なくとも北辺、東辺、南辺に遮蔽施設をもたない可能性の高いことが判明した。既往の調査によって、朱雀大路を挟んだ東対称位置にあたる左京三条一坊一坪にも遮蔽施設の痕跡は検出されておらず(平城第180・491・495次調査、奈良市第119・336・343次調査等)<sup>6)</sup>、朱雀門前は左京・右京の三条一坊一坪を取り込んだ東西約260m、南北約140mにおよぶ広場的な機能をもつ空間であったとみられる。

**坪内道路の検出** 右京三条一坊一坪の南北を二分する位置付近で東西溝SD3359を検出した。この位置は、左京三条一坊一坪で検出した坪内道路北側溝の位置とほぼ一致する。また坪内道路南北両側溝と朱雀大路西側溝SD2600の接続想定位置の間で、朱雀大路西側溝をわたる橋SX3355を検出した。この2点から、右京三条一坊

一坪にも坪内道路SF3358が存在したと推測できる。

**二坪・八坪の築地塀関連遺構** 二坪では築地塀の雨落溝と考えられる素掘溝SD3376を検出した(第552次調査南区)。周辺から出土した多量の瓦類の存在をあわせ、本来築地塀が存在したと推測できる。その約40m南側の地点(第577次調査区)でも南北方向の築地塀基礎SA3430を確認し、その位置関係から一連の築地塀の可能性が高い。東対称位置の左京三条一坊二坪においても築地塀に関連する遺構が検出されており(平城第495次調査、奈良市第119・321・336次調査等)<sup>7)</sup>、右京・左京とも二坪は、朱雀大路に面する東辺・西辺と三条条間北小路に面する北辺に築地塀が築かれていた可能性が高いことがあきらかになった。また、西一坊坊間東小路西側溝SD2641と二条大路南側溝SD4006の接続点付近でもSD2641の西岸に沿って多量の瓦が出土しており、ここにも八坪を遮蔽する築地塀の存在が推測される。(丹羽・番・芝・庄田・浦)

#### 註

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所「平城京右京三条一坊一・二・七・八坪」『奈良県遺跡調査概報(第二分冊)2015年度』2017。
- 2) 朱雀大路西側溝については以下のような遺構番号が付されている。  
SD10950: 第143次調査(宮)(『1982 平城概報』)  
SD2600: 第288次調査(右京三条一坊三・四坪)(『年報1998-III』)  
今回の調査地は平城京右京域が多くを占めるため、SD2600を採用する。
- 3) 金子裕之「律令期の祭祀遺物」菊池康明編『律令制祭祀論考』塙書房、1991。
- 4) 佐々木幹雄「子持勾玉私考」『古代探叢』II、早稲田大学出版部、1985。
- 5) 第566次調査東区南壁、第552次調査北区・南区の南北両壁の朱雀大路西側溝SD2600中軸と朱雀大路東側溝の座標値をもとに算出した。朱雀大路東側溝の座標値は以下の文献に拠る。  
奈良市教育委員会『史跡 平城京朱雀大路跡一発掘調査・整備事業報告一』1999。
- 6) 註5) 文献。
- 7) 註5) 文献。